

正・政・清・聖・性・醒

炉ばたセイ談



令和7年秋号

もう七月が過ぎようとしている。今年は梅雨らしい日々が無かったような気がする。つまり毎日明るいのだ。

鬱陶しい日々が続くのが大体、梅雨時の毎日だ。お天気も大分サマ変わりつつあるのか、日々同じような日課で、夏がいつの間にかちゃんとやって来ているのだ。

子供の頃は学校があるので季節がはつきりしていた。今はすでに歳も九十を過ぎて、もうすぐ百に近い。ということとは、ちょっと変な気がする。つまり実感がないのだ。仕事らしいことを何もしていないことも大いにそのわけだ。

つまり生きているということとは、何かしているということだ。その何かが、今は何もないのが、つまり虚無ということがその実体だ。死んでしまえば、全く同じことなのだろう。

しかし、季節の移ろいは日々生きている限り実体験しているのだから、文字通りありがたい。これもありがたいのが、当たり前になっていて不感症に近い毎日を送っているから、昔風に云うなら、バチ当たりに近い人生なのだろう。

朝夕、仏壇に向かつて、つまり先祖の霊に般若心経を唱えながらお祈りするのが、今のうちにせよの毎日の務めだ。

目次

八重山に縁を得て六十一年	中西 喜彦	1
— 起業 —	十五代沈壽官	5
大内宿における持続可能な観光の取り組みとしての		
	茅葺屋根葺き替え	
	祈答院隼人	9
桜島オオヒト奇譚	祈答院隼人	16
入来院のこと (2)	溝口 敬人	24
ストーム ～ 学祭の打ち上げでよみがえる鹿大生時代の		
	よき思い出 その3 ～	
	串田 達治	28
『出水喜多会の活動について』	白男川孝仁	38
禅に御縁を頂く	中山とし子	44
旅は道連れ	奈良迫英光	54
郷中 (ごじゅう) 教育 — 歴史を訪ねる旅 (19)		
	下土橋 渡	58
「日本人」について考えてみた		
	奥村 太	68
曾木発電所 ～ 日本の化学工業発祥のきっかけとなった発電所		
	— 歴史を訪ねる旅 (20)	
	下土橋 渡	79
アメリカは自滅し、信頼と技術で今、日本が世界の中心になった		
	中西 喜彦	88
船瀬殿墓 — 入来麓史跡探訪 (2)		
		99
「炉ばたセイ談」の生い立ち		
		101
編集後記		
	入来院・下土橋	102

八重山に縁を得て六十一年

中西 喜彦



昭和三十九年七月、鹿児島大学入来牧場新設予定地の測量のために、八重山に入山しました。大学では畜産学科が新設されたのを機に、鹿児島高等農林学校から引き継いだ種子島牧場（四百五十ヘクタール）を入来に移動新設する計画がありました。戦後、外地から引き揚げ入植し、開拓後日本経済の発展とともに離農された方々の跡地（農家二十二戸の農地約百ヘクタール及び国有林五十ヘクタール）を確認するための測定です。ちょうど八重山の山頂に位置し、標高約四百五十メートルから五百十七メートルの東南向きの傾斜地です。コンパス測量法で、約一週間泊りがけ

で三百三十三か所の測量点を作って面積の確定を行いました。これは、背丈の二倍ほどのススキを刈り取って道を作る仮払いを行った後、巻き尺で測った地点に棒を立て、測定者がコンパスを用いて角度や距離を測定するという3人がかりで移動しながら行う測量法です。入山して一番驚いたのは、入来役場の方により仮払いは行われていましたが、圧倒的にススキが群立している状況だったことです。このように、開場まで四年、土づくり十年、草づくり十年、牛づくり十年、その後の畜産バイオテクノロジー技術を用いた牛の受精卵移植や異種移植用ミニブタの開発の研究のためにと、三十八年入来牧場に通い続けました。

退職後、平成二十一年九月に第七回入来薪能が行われました。その年の三月、鹿児島謡曲連合会の会報に入来薪能の意義などを書い

ていただくために、入来院ご夫妻の元を訪ねました。入来院家を訪問した際に、はじめて茅葺門をくぐることになり、このような萱の活用方法があるのだと感心しました。茅葺門は入来町の文化財として登録されております。また、もう一つの文化財である「入来文書」は、故・入来院貞子さんが解説しておられ、日本の封建社会の解析ツールとなっています。その主な内容は、日本の武士は一所懸命に地域と密接な関係を持つのに対して、西洋の騎士は金銭による傭兵集団であるということです。私はこの文書の手解きを受けたことにより、日本と西洋社会の考え方の具体的な違いを知ることができました。

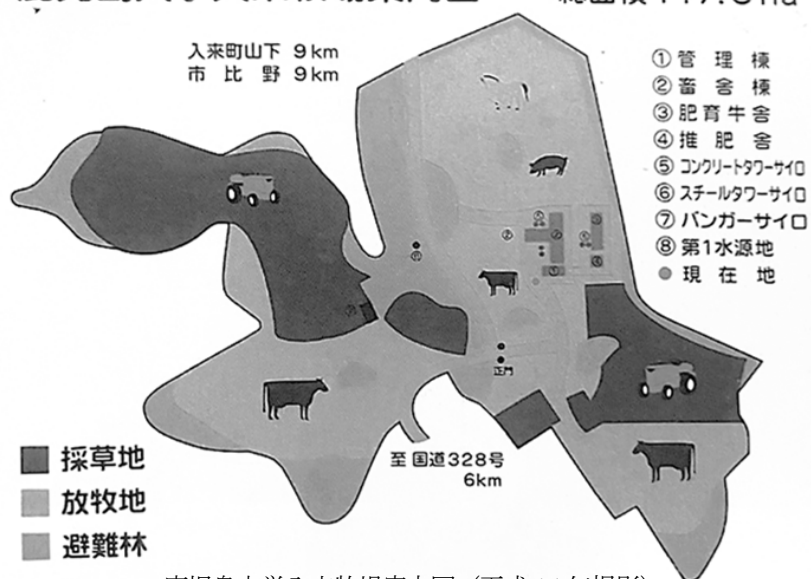
このように、私は六十一年にわたる入来とご縁のなかで、生きものとしての生き方を八重山の山頂にある牧場で学び、国としての在り方を八重山の麓で学ばせていただきました



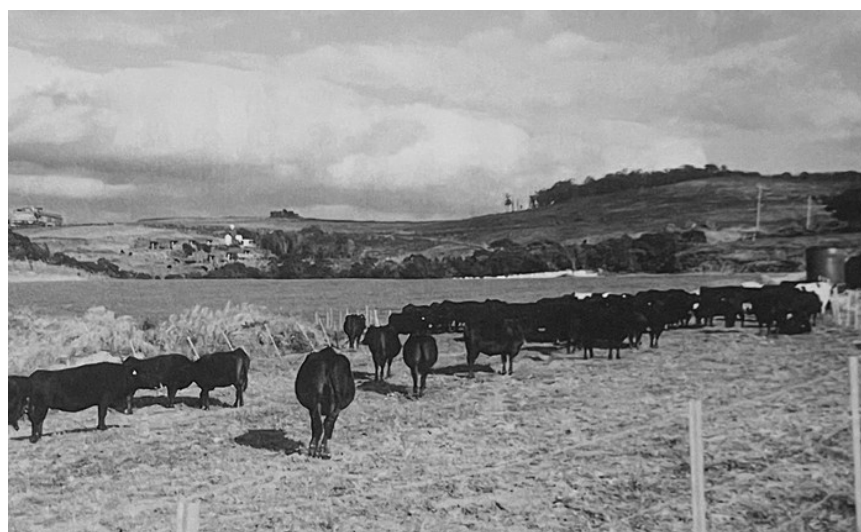
コンパス測量時の休憩

鹿児島大学入来牧場案内図

総面積 147.8 ha



鹿児島大学入来牧場案内図（平成 14 年撮影）



入来牧場の様子（平成 12 年撮影）

た。この入来とのご縁に深く感謝しております。

以前から、私は入来院家が鎌倉時代から長く続いている理由について筆者なりに考えていました。昨年、日本国史学会会長だった故・田中英道氏が日本人の起源を求めて沖縄県の島々を訪問されました。そのなかで、八重山列島が地勢的に八重に重なり合っていないことに注目し、ヘブライ語の「ヤーベ（尊いもの）」という意味が呼び名の由来ではないかと推測されていました。それを聞いて、入来の八重山も同じような意味であると感じました。その尊さは水が枯れない豊かな面にあると思います。実際に八重山は、鹿児島市の甲突川や旧川内川の源流にもなっています。入来院家が六百五十年の歴史を支えている理由は、前述の武士階級と住民の密接な関係に加えて、尊い山に囲まれていることも要因の

一つではないでしょうか。豊富な水源と史跡に恵まれた入来がますます繁栄することを祈念しております。

（鹿児島謡曲連合会前会長、鹿児島大学名誉教授、炉ばたセイ談会会長）



― 起業 ―

十五代 沈 壽官



今年（明治四年）はわが社の創業150年に当たる。創業のくだりは幾度も述べて来たが、改めて記しておく。

明治四年、廃藩置県により薩摩藩窯は廃窯となった。その後残された施設と技術者を中心に「薩摩陶器会社」が設立される。

社長以下幹部は、以前の薩摩藩窯の要職についていた上級士族がそのまま引き継いだ。しかしながら、これまで薩摩焼、その中でも「白焼き」と呼ばれる白薩摩は一切販売されなかった。

「白焼き」は藩主から他藩の藩主への贈答

品や江戸の薩摩藩上屋敷での接待に用いられるのが通常である。したがって一般人がいくらお金を積もうと入手することは出来なかったのである。

「武家の商法」という言葉があるが、いきなりの民営化で商いは当然不調であった事は想像に難くない。まして、国中が大混乱の最中である。例えて言うなら、公務員が全員失業した様なものである。

しかし、明治6年のウィーン万博へ日本政府は正式に国家としてエントリ―する。

薩摩陶器会社も十二代 沈 壽官工場長を督励し大作を完成させる。高さ1メートル80センチの一对の豪華な大花瓶である。

この作品はウィーン万博で大注目を浴び、「進歩賞」を受賞した。

当時、さしたる輸出品も無かった日本政府にとつて、好評を博した日本製陶磁器の輸出

は外貨獲得の一つの手段に思われたのであるう。

全国の産地に輸出用の洋食器の生産が促され、其々に取り組むことになった。

しかし、部屋のインテリアとして日本製の作品を飾ることはオリエンタルな面白みもあったが、何も食器の全てに至るまでそのテイストで、とまでは行かないのである。

このプランは完全に失敗であった。

薩摩陶器会社にとっても、生産したものの売れず、大量の「死に在庫」を抱えて困り果てていた。香港や上海まで販売を試みたが残念ながら、どうにもならず経営を圧迫し続けた。そしてついに65名のリストラの決定に至る。

十二代 沈壽官は経営陣に対して何とか翻意を促すがついに会社の決定は覆ることは無かった。

当時、9歳から職業に就くのが一般的であった彼らに転職の道はなく、解雇されたら、その日から路頭に迷う事になる事は明白であった。

そこで工場長十二代 沈壽官は自ら辞表を出し、この65名と運命を共にする事を決断する。多額のお金を借り「玉光山陶器製造所」を設立し、そつくりそのまま65名を雇い入れた。それが明治8年である。

今の自分に置き換えて、この決断が出来るか？と問う。知り合いの経営コンサルタントにたずねてみた。

以下は彼の言葉である。

会社は誰の為のものか？と考えた時、勿論リストラは人件費を減らし赤字を止める為に行われる。しかし同時に会社はお客様、従業員、オーナーのものであり株主の為だけのものではない。

そして、その中で大切なのはそこに働く社員
の生活、生き甲斐である。

バランスシートでみると、左側の資産欄には有形資産の機械設備がある。しかし、実はそれに加えて無形資産である職人の技術があるのだ。リストラされた職人達ではあるが、十二代は彼らの持つ潜在的な無形資産(技術)は、しっかりと方向性を示せば真の力を発揮出来るという確信があったのだろう。更に、その力でマーケットを開拓できる自信があったのだろう、と解説してくれた。

実に素晴らしい!!と大絶賛であった。

現代ならリストラを実行した部長はその功を認められ役員に昇格するのであろうし、株主からは多額の賞与を認められるかもしれない。

技量が低いから、勤務態度が悪いから、周囲とぶつかるから、といった理由で解雇された彼らが十二代の元で生まれ変わった様に飛躍的に成長し、3年後の明治11年には東京の新橋に店を出し、更に明治13年には「薩摩陶器会社」の瓦解に伴い、残余の職人も吸収する事になる。そして、明治工芸を代表する人物へと存在感を示していくのである。

かくのごとく混乱期には、どんな時代の中でも胆力があり先見の明を持つリーダーがいてくれる事が部下にとって本当に有りがたいことだが、果たして自分に当てはめた時、これが可能だろうか？

余程、回りの人材に恵まれた方だったのだろうが、不安も凄まじいものだったと思う。

一步も引かないその決意の裏には、切り捨てられて行く部下達を決して見捨てない、という強い愛情を感じずにいられない。



大内宿における持続可能な 観光の取り組みとしての

茅葺屋根葺き替え

祁答院隼人



日本経済大学大学院西嶋研究室では、二〇二二年六月十七日に大内宿観光協会の事務局長「田沼氏」にZOOMでオンラインインタビューを実施した。以下に、大内宿観光協会の事務局長とのオンラインインタビューの内容を記す。

大内宿における持続可能な観光の取り組みとしての茅葺屋根葺き替えについてお尋ねします。

一、茅葺屋根葺き替えはどのくらいの周期で行われますか

茅葺屋根葺き替えに関しては、おおよそ二〇年をめどに行っているのですが、どうしても二〇年経つ間に悪くなっていく面があります。例えばトタン屋根や瓦屋根だと屋根面が水平になっていると思いますが、茅葺だとどうしても屋根面がでこぼことなります。その低いところに雨水が流れ込んできたりとか、日の光によって乾燥のしかたが違ったりして、よく乾燥する部分（例えば日照がある東面、西面、南面）に関しては、傷みが少ないのですが、日照が少ない北面では、どうしても乾燥が弱かったりするため、悪くなる部分が出てしまうのです。

そういう屋根面では二〇年経たないうちに雨漏りし始めることもあるので、十二年〜十五年ぐらいで補修作業になります。この作

業では、屋根をはがさないで、今ある屋根の中に新しい茅を差し込むという工事を行っています。そのため大内宿の屋根の葺き替え工事は、世界遺産の白川郷で見られるような、屋根全面の葺き替え工事というのとはほとんどありません。先述の通り、どうしても傷み具合が違う部分が出てきますので、傷んだ面を中心に部分的に葺き替え工事を行うことがほとんどです。

そして残った部分に関しては、傷みの度合いを見ながら、三年から五年後にまた工事を行うことになります。

大内宿では全面的な葺き替え工事を行う可能性があるのは、重要伝統的建造物群保存地区の申請の前に、茅葺屋根の上にトタン屋根をかぶせた家です。このような古民家の屋根は、現在も存在していて、保存会の方でトタンを除き茅葺屋根に戻してもらおうをお願いを

行っています。このように茅葺屋根の上に被せているトタンを取り除くときは、全面葺き替えとなるため、新しい茅葺屋根になります。しかし費用的な問題や、後継者の問題などがあるため、トタンをはがして茅葺屋根に戻す家は、いまのところは現れていないのが実状です。大内宿集落内では、今も茅葺屋根の上にトタンを被せた家が四軒残っています。

二、茅葺屋根葺き替え作業においては住民組織「結の会」で行う他、外部の専門家に委託することはありますか

今は住民のみで葺き替え工事を行うことはなくなりました。地区内に茅葺屋根の葺き替え業者になった人が二人いますが、その業者に工事委託をしています。そして屋根の葺き替え工事がある際には、その業者と一緒に地区住民も参加し、葺き替えや掃除作業を手伝うのです。そして業者と一緒に葺き替え工

事を手伝う住民には、賃金は発生しません。それは、「結の会」としての慣習です。以前は保存会が世話役となり、地区内の人達と協議し、次にあなたの家の屋根というふうによつていたわけです。

以前はおおよそ二〇年経つ屋根の状況を見ることで、この面とこの面は、来年にしましょうなどと言つて行つていたのですが、現在は業者が保存会と協議しながら葺き替え工事の順番を決めています。また古民家の茅葺屋根の葺き替えにおいては、保存会が国の補助金申請のアドバイスをしてくれます。そのため住民は、この業者に感謝しているのです。

三、茅葺屋根葺き替え作業における茅葺資材の調達、作業期間、作業経費などを教えてください

茅葺屋根の資材についてなんですが、よく茅、茅葺きって言うのですが、実は茅という

植物はなくて、屋根に使う植物のことを「茅」というのです。大内宿では、ヤマススキを使っています。一部は、アサガラとイナワラも使つて屋根を作っています。

ヤマススキは、大内宿保存会が年三回集落内において茅刈作業をしています。また茅葺屋根の家の者もそれぞれ茅刈して屋根葺き替えの材料として準備します。しかし、一軒の茅葺屋根の葺き替えには、保存会と個人で準備したものでどうしても足りません。そのため足りない分は業者に補填してもらうということになります。

業者は大内宿周辺の茅を刈取っているのではなく、下郷町内に農業をやりながら茅を刈っている農家があるので、そのような人たちから購入することで、大内宿集落内の茅葺屋根の葺き替えに使っているのです。

足場材は大内宿保存会が管理しているの



大内宿の茅葺屋根

で、その足場材で屋根業者と住民が一緒に足場を組んで、足りない資材に関しては業者が補填します。足場材を地区会が持っているということで、葺き替え工事の費用は随分と抑えられます。



大内宿の日本家屋

足場材を自前で持つということになった経緯は、一軒の工事費用が高くなってしまうと、どうしても国に補助申請を行う都合上、

二軒、三軒の古民家が、葺き替え期限内にできなくなる恐れがあったからです。一軒の工事費用を抑えることができたおかげで、年に二軒から三軒、多い時は四軒というように、屋根の葺き替えができるようになったのです。

屋根の葺き替え工事の期間と経費については葺き替える屋根の面積や工事期間中の天候により異なります。一般的な場合、葺き替え工事の期間は、約三週間〜一カ月（作業実働日は十五〜二十日間）、経費は面積により異なりますが（屋根半分葺き替えた）場合、四〇〇〜五〇〇万円位です。そのうちの九割は、文化庁の国庫補助金によって賄われています。補足ですが、およそ一つの屋根の葺き替え工事において、業者が連れてくる職人の数は

三人くらいだとして、その他に地区の住民三〜五人ぐらいが一緒になって工事を行った場合にこのぐらいの時間と費用になります。

四、茅葺屋根葺き替え作業における経費では国などの補助金制度があるという点ですが、その制度と名前を教えてください

文化庁による国の国庫補助金制度を利用しています。葺き替え工事の費用は、基本的に補助金で賄っています。古民家の内部におけるリフォームは住民負担ですが、外側に見える柱、はり、漆喰の壁、土壁などを修繕する場合は、国庫補助の対象になります。

その他の修理に関しては住民負担になります。重要伝統建造物群保存地区では、基本的に、建造物の外側で、目に見える部分については、現状維持が最低ラインです。それ以上悪くすることができません。例えば、白い

漆喰壁をホワイトボードにすることはできないし、可能な限り茅葺屋根はそのままに残すことです。

現在、特記すべきこととしては、大内宿の古民家の屋根の三角形の一番上の棟といわれる部分なのですが、そこにおいて屋根の葺き替えの最後の工程として、茅葺きを閉じなければならぬのですが、形がまるくなってしまうため雨漏りの心配があります。そのためその部分には、二〇年前まではトタンをかぶせて雨漏りしないようにしたのです。しかし文化庁から、やはりそれでは外観の現状維持から外れているという指摘を受けました。

そのため現在その部分には、杉の皮を巻くことで処置しています。ただし杉の皮だけだとすぐ雨漏りしてしまうので、文化庁と協議して、その下の見えない部分に関しては、ゴムシートを入れることで、雨漏りしないよう

にしています。雨仕舞の対応と外側の意匠維持は、そうやって守っているというようなところですよ。

五、茅葺屋根葺き替え作業における専門職人の人材において、国などの紹介制度はありますか、あればその制度名と内容を教えてください

専門の茅葺職人を使うことについては、実は大内宿地区の中でそういった専門の人に委託することがなかったため、職人の紹介制度等があるというのは気に留めたことはありませんでした。

現在、大内宿では茅葺文化協会という全国組織に所属していて、その協会に所属する職人による研修を、大内宿の古民家の屋根の葺き替え工事に際して行っています。もし他の場所での茅葺屋根の葺き替えの研修に来ませんかと声がかかれば、大内宿地区会の若い世

代の者で、都合がつく者が行ったりして、交流を図っています。

六、茅葺屋根葺き替え作業において、地元での人材育成の取り組みについてどのような取り組みを行っているかを教えてください

大内宿の屋根葺き工事の時に、業者と一緒に住民も職人たちに協力して葺き替え工事の作業を行うことで技術を習得しています。そしてそれを伝承していくようにするために、地区内に茅葺屋根の葺き替え研修場をつくりました。

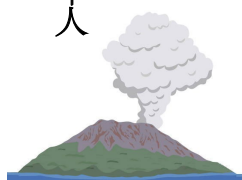
大内宿の地区内には、集落内に小学校の分校があったのですが、現在は廃校になり、建物だけ残っています。そしてそれは下郷町が管理する施設ですが、町からその分校の建物を借りることで、そこにある教室だったところに古民家の屋根だけの模型を作っています。

そこで基本的な茅葺屋根の葺き替え技術の講習会を行っているのです。大内宿地区会に所属する田沼さんという茅葺屋根の職人が先生になって、後輩に教えるという研修を実施しています。大内宿では、集落内で観光業を営む三〇代後半から四〇代の者がいますが、この世代の人が研修を受けているところです。しかしその下の世代、三〇代前半から二〇代の若者は、なかなか大内宿に戻ってこないため、この世代の若者が大内宿に少ないのが現状です。その要因のひとつには、二〇一一年の東日本大震災以降、観光業で生活するのが難しいと考えている若者が多いことがあります。そのため三〇代後半の者までは技術の習得ができてきたのですが、その次の世代に教えていかなければならないというのが今後の課題になっています。

（作家）

桜島オオヒト奇譚

祁答院隼人



一九一三年一〇月下旬、上之原（現在の鹿児島市吉野町）の原五社神社の境内では宮籠^{みやごも}り祭の準備が行なわれていた。宮籠りとは、神社の氏子が拝殿に集まり、神職が祝詞を奏上し、お札と撤饌^{てうせん}を下げるものである。多くの神社では八月と九月の一五夜に行われているが、原五社神社では一〇月末に行われている。秋が深まるこの時季は、南国鹿児島でも肌寒さを感じられる月夜であった。

「坊、寒むんかで、今日はこの辺で戻いか」
宮籠りの準備を見守っていた老夫が腰を上げながら、孫らしい幼児に帰宅を促した。

「いやや！オイはまちつとこけえいたいけ

ん！」

すっかりした眼を拝殿に向けた幼児の姿を見ながら老夫は目を細めて笑った。

「おう、そうか、そうか、坊はこけえが好っじゃんか？」

そう言って老夫は孫の横に腰をおろし直した。

「うん！お山（桜島）とお月さんがきれいに観れるこけえが一等すいとう！」

孫の言葉に老夫はいっそう目を細めた。

「この神社は、元は御山の麓の黒神にあったんじゃ」

江戸時代の安永八年（一七七九年）に桜島で大噴火があり、桜島の黒神の人たちは、吉野へ移住した。故郷をなつかしんで建てたのがこの原五社神社で、祭神は黒神の腹五社神社から勧請したものである。黒神の腹五社神社は、大正大噴火（一九一四年）に埋没した

鳥居の奥に今もある。老夫は独り言を呟くように続けた。

「ワシらは、元々は黒神の民やったが安永の御山の噴火により、こけえ移つて来たんじゃないや、こん神社はワシがちやうど坊くらいの年にこけえできよったんじゃない！」

原五社神社は、桜島黒神村より移住した人等が、故郷の守護神腹五社の祭神を奉斎し、安政三年（一八五六年）に社殿を建て祭つていた。桜島全島の守護神は五社大明神（月読神社）と云われており、島津家歴代藩主の崇敬が篤いことからこの御分霊を勧請して祀り、当地の字名上之原をとり原五社神社と称すると云われている。

「坊の言う通り、御山の神様とお月さんは一緒なんじやって。そして腹五社の祭神には、瓊々杵尊（ニギノミコト）がおじやる。ニギノミコトは月読様の姉の天照大神の孫で

天孫と云われるんじゃないが、大神の命で日向ひむかの高千穂峰に降ることとなつたんじゃないが、これがこの国の始まりとされる天孫降臨なんじやよ」

幼児は老夫のはなしを聞いているのか聞いていないのか、相変わらず眼を社殿に注いだままであった。老夫は幼児を優しく見守るように呟きを続けた。

「そしてニギノミコトの嫁になるのが、山をつかさどる神である伊弉諾尊（イザナミノミコト）の子である大山祇命（オオヤマツミノミコト）の娘の木花開耶姫命（コノハナサクヤヒメノミコト）なんじや。こんヒメノミコトは、桜島よりもっと大きな御山である富士山の神と云われておるんじゃないや。腹五社にはこん他に、ニギノミコトとコノハナサクヤヒメノミコトの子のホオリ（彦火火出見尊ホホデミノミコト・山幸彦）、そしてホオリと

綿津見神（ワタツミノカミ・海の神）の娘の豊玉姫（トヨタマヒメ）の子である鵜草葺不合尊（ウガヤフキアエズノミコト）、豊玉姫の妹の玉依姫命（タマヨリヒメノミコト）が祀られておるんじや。そしてこんウガヤフキアエズノミコトとタマヨリヒメノミコトの子が若御毛沼命（ワカミケヌノミコト）、すなわち初代天皇である神武天皇じやろ」

老夫の呟きは幼児に向けられたものではなく、自問自答のようであつた。

「おんじよ、お山が腹けえとるごたあようじや？」

幼児が放った言葉に老夫は驚き立ち上がつて桜島を見た。すると、ズーンという地鳴りのような音が響いたかと思うと大地が大きく揺れ出した。

「坊！こつち来い！おんじよの方に来い！」

老夫は幼児に覆いかぶさるように抱きか

かえて地面に臥せつた。そしてどのくらいの時が流れただろうか。老夫に守られた幼児が老夫に耳打ちするように言った。

「おんじよ、もう音は聞こえんよ」

幼児の言葉に老夫は顔を上げて辺りの無事を見渡した。

「坊！お前はお山の声が聞けんのか？たいした童^{わっは}じやつて！は！は！は！は！」

老夫はそう言っていると、幼児を高く抱き上げて高笑いをしたのだつた。

これより十一月から十二月にかけて、南九州一帯で群発地震が発生した。しかしその年は、二月二〇日に薩摩藩士出身の山本権兵衛が第一六代内閣総理大臣に就任、一〇月十一日には川内線が東市来駅から鹿児島駅までの区間で開通し、武駅（現在の鹿児島中央駅）が開業するなど慶事が続いていたため、だれも桜島の異変を心配する者はいなかった。

年が明けて一九一四年の新年を迎えると、地震発生の間隔も短くなり桜島の一部集落の井戸の水位が低下するなど異変が認められたため、人々はさすがに桜島の噴火が心配になつてきた。そして、松の内が明けた一〇日土曜日は地鳴りを伴う地震が続いて起こつたため、週末で賑わう天文館では、街を行き交う人々は皆桜島を眺め、再び大噴火が起こるのではないかと口々に安永の大噴火のはなしをして心配した。

「おんじよ、オイと神社にいつとき行つが！」
一二日のまだ夜明け前、幼児は老夫の寢床に行き、原五社神社に行くことをねだつた。
「坊、んだもんしたん？夜も明けちよらんに？」

一月十二日の夜明け前の午前六時頃は、南国鹿児島でも寒い朝であつたが、幼児は既に半丁を羽織つていた。

「おんじよ、早う行かんと始まつちよぞ！」
幼児に促された老夫は、何やら胸騒ぎを覚えたため自分も半丁を羽織ると幼児と手をつないで原五社神社に向かつて。現在の鹿児島市吉野町からの桜島の向きは、東の空が背景となるため、山の向こう側には薄つすらとオレンジ色の空が浮かんて来つたつあつた。
「坊、始まつちゆうと言うたな？いつたいなんが始まあとよ？」

老夫は、自分の手を引くようにしながら、手前を黙々と歩く幼児に話しかけてみたが、幼児の返答はなかつた。そして二人が原五社神社に到着したときは桜島の上に朝陽が昇つていた。

幼児は桜島が見える展望に立つと身じろぎもせず山に向かつて立ちすくんでしまつた。そのため老夫も幼児と同じく山に向かつて立ちすくんだ。すると老夫の手を握つた幼

児の手に力が入ったとたん、物凄い轟音が桜島から響いてきた。

「ドドド~~~~ン」

一九一四年一月一二日午前八時頃、桜島南岳の山頂と中腹から白い煙が立ち登ったのに続き更に大きな音がして大噴火が始まった。

「こりやあいつたい、どげしたこつじや？」

桜島南岳から立ち昇った噴煙はみるみるうちに大きくなつて山の高さの何倍もの高さに及んだ。

「おんじよ、あれにオオヒトさまがおいやつど！」

幼児は山の上の空の天井に届かんばかり立ち昇る噴煙を巨人に見立てているようであった。しかしそれは確かに、大地から天空に立ち上がった巨人のように見えるものであった。

「ドドド~~~~ン、ドドド~~~~ン」

烈しい噴火が繰り返すように続いた。大正三年桜島大噴火では、噴煙がおよそ一八〇〇〇mまで上がり、大量の軽石や火山灰が降り積もつたと云う。

「坊は、こんこつがわかつちよつたな？なんちゆうこつじや？」

老夫は幼児の後ろに廻りそつとその肩を抱きながら膝をついて幼児の目線で桜島の大噴火の様子を眺めた。

「おんじよ、オオヒトさまが腹けつちようぞ？」

立ち昇る噴煙からはときおり稲妻が光るため、幼児にはそれがまさに巨人が怒っているように見えたのだらうと老夫は思った。

「まこち坊の言うとおりにや！あれにおわすオオヒト様は、まこち、月読様じゃつど！月読様はイザナギ様とイザナミ様のお子で、『滄海原の潮の八百重（ヤオエ）を治すべし』



1914 年 1 月 12 日の桜島大噴火（鹿児島県立博物館蔵）

と命じられたそうじゃ！更に黒神の腹五社にはホオリ様が祀られとるが、その嫁の豊玉姫は海の神じゃって、じゃどん、こんオオヒト様は、綿津見神（ワタツミノカミ）とも縁続きなんじゃ」

「滄海原の潮の八百重を治すべし」とは、潮汐と月の関係を現すと考えられる。また、記紀の山幸彦と海幸彦の段では、ホデリ（火照命・海幸彦）の釣針をなくして困っていたホオリ（山幸彦）が、塩土老翁（シオツチオジ・海人族）の案内によって綿津見神（ワタツミノカミ・豊玉彦）のもとを訪れ、綿津見神の娘である豊玉姫と結婚している。

「おんじよ、ないごち、オオヒトさまは腹かつちよんか？」

幼児はここに来て初めて老夫の方を振り返って聞いた。

「そうじゃのう…。先の日清日露の戦争で、

帝国海軍は黄海海戦と日本海海戦と立て続けに勝利を収めたが、多くのもんが海の藻屑になつてしもたんじゃ…。そん海戦の司令官はどっちも薩摩ん志士じゃったもんな…」

黄海海戦は日清戦争における最大の海戦で、日本連合艦隊の司令長官は薩摩藩士出身の伊東祐亨^{すけゆき}であった。また日露戦争における日本海海戦の日本連合艦隊の司令長官もまた薩摩藩士出身の東郷平八郎であった。

「おんじよ、ないごて、薩摩ん志士はそげん海軍にこだわったとじゃ？」

幼児のこの質問に、老夫は応えることが出来なかった。薩摩藩は一八六三年八月に錦江湾に進撃してきた英国海軍艦隊の砲撃で、城下の約一割を焼失したほか砲台や弾薬庫に多大な損害を受けるといふ経験をした。西洋列強の近代化された海軍の威力を目の当たりにした薩摩藩士たちは、これからの戦争は海軍の

力が決め手になると考えたのではないか。

「おんじよ、オオヒトさまが今夜上がって来なさるようじゃ！みんな何処かへ逃げんといかん…」

幼児の質問に何とか応えようとしていた老夫は、今の幼児の言葉に驚いた。

「坊！オオヒト様が上がって来つとは、何処に上がって来つとじゃ？」

老夫はこれまでの幼児の言葉が全て実現していたため、今度も間違いなくそうなると考えた。

そして、一二日の一八時二九分にM7・1の地震が発生し、鹿児島市において死者、行方不明者五八人の大災害となったのである。

(作家)



入来院のこと（2）

弁護士・みぞぐち法律事務所

溝口 敬人



入来院氏^{いりきいん}が600年に及ぶ拠点とした入
来の地（薩摩川内市入来町）は、入来麓の武
家屋敷群が残り、清色城跡^{きよしき}も残っている。清
色城は、東北に川内川下流の樋脇川（清色川）
を抱き、西南に谷が巡る中世の山城で、本丸
のほか5つの主な曲輪を配し、山上に水田も
あったという。入来麓はその麓に形成された
武家集住地で、玉石垣と生垣が連続した区割
りの歴史的景観が残っている。

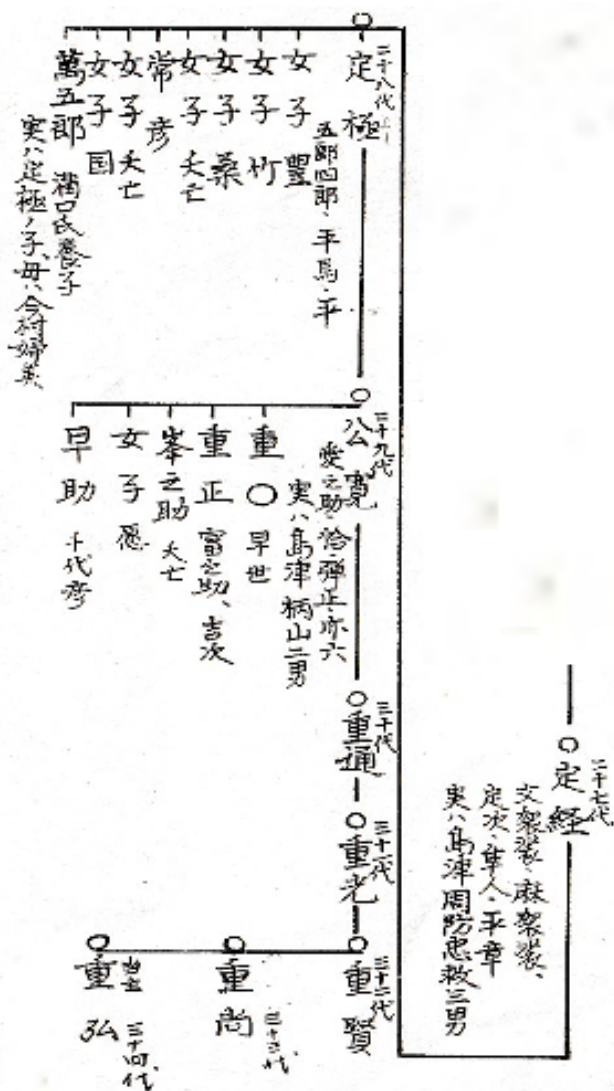
入来院氏は、相模国渋谷庄の地頭・渋谷光
重が宝治元年（1247年）の宝治合戦の恩

賞として、薩摩北部の東郷、祁答院^{けどういん}、高城^{たき}、
入来院、鶴田^{つるた}の領地を得て、次男から六男を
下向させたのが始まりで、五男・定心が入来
院氏の祖である。この渋谷5宗（族）の中で
は、入来院氏の威勢が最も揚がり、他の一族
とよく連携を保った。6代重門から戦国時代
の終わりまで200余年に渡って島津氏と死
闘を続けたが、島津氏と利害が一致する時は
よく協力もしあっていた。『入来町誌（上巻）』
に添付されている入来院の系図で、一番左側
の溝口萬五郎が私の祖父である。

清色城は島津氏に落城させられたことが
ある。応永2年（1396年）に守護島津元
久から攻められた時には、菱刈氏、牛屎氏の
応援を得て退けた（山引合戦）。しかし、応永
4年（1398年）に、島津元久軍5千、島
津伊久の軍2千等の大軍によって清色城が包
囲された際には、食料が尽きたため和を求め、

元久がこれを許し囲みの一角を解いたので、
7代重頼は城を棄てて逃げた。城は伊集院頼
久が領したが、入来郷民の反抗にあつて頼久
は城を去り、応永18年（1411年）に重
頼・重長（8代）父子が清色城を奪回した。

他方、島津氏との協力関係で特に目を引く
のは11代重聡である。文明5年（1473
年）に元服し、延徳2年（永伝元年、149
0年）に父・重豊の譲を受け家督となつた。
永正5年（1508年）に守護島津忠昌（奥



入来院の系図 (抜粋)

州家)が自害した後、後を継いだ島津忠治、忠隆の兄弟ともに短命であったが、重聡は、忠治によく協力し、忠治から父のように信頼を寄せた書状が5通残っている。南九州は大きな騒乱状態となり薩隅日の「三州大乱」といわれる状況となったが、忠治の末弟・島津勝久(忠兼)を軸に、島津実久(薩州家)と、島津忠良(日新斎、相州家)・貴久父子の三つ巴の争いとなった。

薩州家・実久は、北薩地域に勢力を拡張していたため、川内川下流域の權益を巡って渋谷氏一族と対立し、忠良父子と入来院氏との利害関係が共通のものとなっていた。重聡は忠良父子の味方がほとんどない中で、忠良父子と提携して各地の合戦に出陣して活躍したほか、娘(雪窓院)を貴久に嫁がせ、天文2年(1533年)に長男・義久、天文4年(1535年)に二男・義弘、天文6年

(1537年)に三男・歳久が誕生している。

貴久は天文14年(1545年)に守護職を承継し、父・忠良の補佐によって善政を施した。忠良は聡敏で仁慈の心が厚く、いろは歌を作って領民を教化したことが知られている。

重聡の嫡子・12代重朝は、天文4～5年(1535～6年)頃に家督を承継した。重朝の時代には、川内地方全土のほか錦江湾に到る地方にまで勢力を広げた。広大な所領を手に入れた。しかし、重朝は驕傲なふるまいを見せるようになり、入来院氏の勢力拡大をおそれた貴久は、これを戒めて領地の一部を没収した。天文13年(1544年)には、重朝の妹で貴久の室の雪窓院が病没した。重朝は、天文17年(1548年)、加治木の肝付氏、帖佐の祁答院氏、蒲生氏らと組んで島津氏に敵対したが、翌年に加治木城が陥落すると、罪を謝し降伏した。ところが、重朝は、

天文23年（1554年）、祁答院氏、蒲生氏らと連合してふたたび島津氏に叛いたが、岩剣城の戦い、蒲生城の戦いで敗れ、渋谷一族は本領に退いた。

重朝を継いだ13代重嗣は、父・重朝と違つて勤仕^{きんし}の礼を怠らなかつたため、貴久の信任も厚く恩免を受け、永禄2年（1559年）には鹿児島^{鹿児島}の知行地を拝領している。しかし、永禄年間（1558年～1569年）になると、貴久は薩隅2州のほとんどを征服し、天文年間から頑強に抵抗していた渋谷一族も、入来院氏と東郷氏を残すだけとなった。そのため、重嗣は、元亀元年（1570年）に東郷氏と親族会議を開き、領土をことごとく献じて島津氏に降伏した。貴久は、これを許し、入来院氏に清色（入来院）、東郷氏に東郷を与えた。入来院氏の存亡をかけた英断であったが、存続できた基礎には重聡の島津氏との協

力関係の存在があつたものと思われる。『入来院史』は、この場面を次のように簡潔に記述する。

「此の頃島津氏の武威旭日の天に冲する勢あり、さしにも強勢^{たの}を待みて天文年間より頑強に抵抗せし渋谷一族も、遂に勢窮まり、元亀元年正月 重嗣 親族を会し、議して曰く。我が族島津氏に抗争する事久し、今や一族孤立するに至り、為すべきの道尽きたり、悉く領土^{ていど}を献じ罪を軍門に請はんと、一族之に同意す。」

重嗣の子・14代重豊の代になると、入来院氏は、島津氏の日向平定（天正4年、1576年）、耳川の大合戦（天正6年、1578年）、肥後征伐（天正8年、1580年）と相次いで従軍し活躍をしている。重豊の後には島津氏からたびたび養子に迎え、島津氏の一門として遇されるようになった。（完）

ストーム

ゝ 学祭の打ち上げでよみがえる
鹿大生時代のよき思い出 その3 〳



串田 達治

私が執行部を務めている福岡県土地家屋調査士会久留米支部の定時総会を間近に控え、出欠や委任状・質問状等への対応にうんざりしていた四月下旬頃、炬ばたセイ談の編集を担当されている下土橋さんから直々に原稿募集の依頼が届いた。

ちよつと待って。読者の皆様には思い出してみてほしい。昨年私は「南国ギャンブラー」と題した競馬ネタを寄稿した。執筆経験、ゼロの素人がとりとめもなく書いた文章にもかか

わらず編集カットされることなくほぼ原文そのまま十四ページにわたり掲載されてしまったのだ。

十四ページですよ!!

第二十号発行記念として巻末を飾った祖母入来院貞子の「渋谷氏五族の消長」十八ページに次ぐ長さである。しかも私の原稿には写真が一枚もない（本当は当時のハズレ馬券の写真でも掲載できればより臨場感が高まってよかったと思うのだが、そんなもん現場ですぐ破り捨てた）ので、最終頁の下段にはかわいらしい競走馬のイラストが添えられていてほっこりした。編集長ありがとうございました。

とにかく前号では実質一番紙面を費やし

てしまったのでさすがに今回は辞退するつもりでとりあえず原稿依頼が届いた旨を母にメールしたら、どうも私の駄文が読者の皆様にとって程よい息抜きコーナーになっているそうで（笑）、逆にそう言われてしまうと天邪鬼な性格の私は、なら今年は文調をガラッと変えてみようと思えたりするのだが、夏の参院選を目前に控えた七月五日現在、政権与党が頑なに反対する消費税減税に何故財源が必要なのか？などというテーマで政治評論をいきなり書けるはずもなく、だからと言って鹿大生時代の思い出ネタにも限界はあり、まさか鹿児島大学名誉教授であられる中西喜彦会長のお膝元に、当時担当教授からの度重なる催促をのりくくり交わしながら卒論提出をバックれることに成功した武勇伝をお届けするわけにもいかない。

結局これといったテーマが思いつかないままここまで徒然とキーボードを叩いてみたのだが、やっぱり鹿大生時代の思い出としてパっと思いつくのは四年間全力で取り組んだサークル活動の中でもとりわけ、団員仲間と輪になって大声を出したあの光景だ。初めて目の当たりにした時カルチャーショックに近い衝撃を受けたので二十数年たった今でもよく覚えている。そうそう、あの野蛮で独特な儀式は確かこう呼ばれていた。

「ストーム」と。

何度も繰り返して恐縮だが、私は平成十三年に鹿児島大学農学部に入學し、入学式を終えた数日後に鹿大混声合唱団ポリフォニー・コールという音楽サークルに入団した。新入生歓迎時期ということで入団前から数人の先

輩方に連れられて大学近くの飲み屋やらカラオケ屋にて過剰な接待を受けていたのだが、四月下旬に入団式といってそれまで個々に入団の手続きを済ませた一年生及びサークルのメンバーが一堂に会する行事があり、式後の懇親会もそろそろお開きになろうかという時に人生で初めてストームなるものを目の当たりにした。

ポリフォニー・コールの部室は私が卒業した数年後には校舎の中に移ったみたいだが、当時は鹿児島市電の純心学園前駅から降りて三十メートルほど北に行ったところ、大学敷地を囲うフェンスをまたいで（よい子はまたいではいけません。不法侵入になります）すぐの運動場の隅っこに佇むプレハブ小屋であった。ちなみにこの部室、令和四年に入来に遊びに行った際に妻と三男坊を連れて久々に鹿大を訪れた時は史跡のようにまだかろうじ



かつてポリフォニー・コールの部室だったプレハブ小屋（令和4年撮影）

て存在していたが、今 구글のストリートビューで見えてみるとようやく取り壊されたみたいである。

そのおんぼろ部室前の広場で急に先輩たちが大きな輪をつくり、いったい何が始まるのか困惑した表情の我々新入生もその輪の中に強制的に入れられた。すると突然、当時のサークル代表である主将が焼酎瓶を片手に大声で叫び始めたのだった。

「ストームいかせていただきます!!」

いきなり焼酎をラッパ飲みしたかと思いきや周囲から合いの手を入れられながら自分の出身高校、所属学部、サークル内の役職を大声で叫び終えると隣の正指揮者に焼酎瓶を渡す。渡された正指揮者は間髪入れずに焼酎をラッパ飲みした後同様に自己紹介。しかも

途中で言葉に詰まると粗相と囃し立てられ、再度飲むところから始めなければならないといった罰ゲームのようなルールも存在するみたいだ。無事叫び終わったら隣のマネージャーに焼酎を渡す。以下同様に繰り返し。混声合唱団なので当然男女関係なく、主将から輪の順に自身の学歴を叫びながら焼酎の回し飲みが延々と目の前で繰り返されたのだ。

私の拙い文章力では限界があるが、この後あれと同じことをしないとイケないとの場の空気で察した我々新入生の気持ちだが、徐々に焼酎瓶が近づいてくるあの恐怖感が少しでも読者の皆様に伝われば幸いである。だってまだよく知りもしない不特定多数の人たちと間接キスしなきゃいけないだよ!!

実際にその輪の中にいた私が受けた衝撃は相当なもので、急に何か変な宗教の儀式が

始まってしまったのではないかとその場から逃げ出したくなったのだが、異様な雰囲気のにまれて足が動かない。そうこうしているうちに自分の番になってしまった。ここまできたらもう観念するしかない。一升瓶を手渡されると不思議と覚悟が決まってしまい、見様見真似で一言も囁むことなくストームなるものをやり遂げて先輩方から拍手喝采を浴びたこの瞬間、本当の意味で晴れてポリフォニー・コールの団員の一人となれたのだ。

まあ私はあの入来院久子の長男でございますので肝は小さい方ではなく、一度体験してしまえば何事もなかったかのようにすんなり受け入れることができたのだが、この入団式の直後に二十人はいた一年生の半数以上は姿を消した。合唱がしたくて残ったほかの一年生も最初はなかなかこのストームに馴染め

なかったみたいだが（特に女性）、そこは音楽系サークルとはいえさすが鹿児島。毎月のように開催される飲み会で毎度毎度ストームが繰り返されると、重たそうに一升瓶を両手でなんとか抱えて小声で聞き取れない自己紹介をしていた一年女子も十一月の鹿大祭を迎える頃には片手で瓶を振り回しながら奇声を発するようになっていたので経験というものはすごく大事である。

（参考）ポリフォニー・コール年間行事

四月…入団式

五月…新入生歓迎合宿

六月…男性コンパ&女性コンパ

七月…七夕コンパ

八月…合唱コンクール打ち上げ

九月…演奏旅行打ち上げ

十月…月見コンパ

十一月…鹿大祭

十二月…クリスマスコンパ

一月…成人コンパ&定期演奏会打ち上げ

二月…四年生企画旅行打ち上げ

三月…卒団式

ところで、ここまで長々と紹介してきたこのストーム、鹿大祭になると盛り上がり方がさらに数段上がる。私が学生の頃は初日に各サークル・部活ごとに神輿を作って市内を練り歩いたり、ポリフォニー・コールでは早朝にお茶漬け、日中はサータアンダーギーと呼ばれる沖縄由来の揚げ菓子をそれぞれ販売したり、学内でアンサンブルをしながら勧誘したりと三日間常にアルコールを補給しながら連日朝早くから夜遅くまで、当番によつては翌日の仕込み等もあるので下手したら徹夜で活動していた。当時は若さで乗り切っていた

のだろうがとにかく他のサークルの催し物も豪華だったし、イベント盛りだくさんで毎年とても楽しかった。

そして疲労と二日酔いがピークになった頃に迎えるのが学祭打ち上げである。ふだんの飲み会ではどれだけ飲んでも顔色ひとつ変えない酒豪たちがあちらこちらで泣き上戸、笑い上戸、怒り上戸、絡み上戸に脱ぎ上戸と化し、体力の限界を迎えた者たちが次々と屍になっていく。それら亡霊たちを無理やり叩き起こし、最後の気力を振り絞って焼酎瓶を手にしながら円になり、ストーム後は皆で肩を組んで「北辰斜に（ほくしんななめに）」を大合唱するのである。

この北辰斜にとは、鹿大の前身校のひとつである旧制第七高等学校造土館の寮歌であり、鹿大の入学式でも演奏される。ポリフォニ

ー・コールではこの北辰斜にを全員で合唱する前に当時の主将が「巻頭言」と称する口上を唱えるしきたりとなっていた。少し前のページでさらっと書いたようにストーム中では言葉に詰まったら粗相とされるのだが、そもそも完全にできあがってしまっていて呂律もうまくまわらない状態で自己紹介に続きこの巻頭言まで一気に唱えるのは至難の業だ。私は三年生だった平成十五年の前期・後期の主将をつとめたが、ただでさえ普段あまり活舌がよろしくないためこの年の学祭打ち上げで致命的な粗相を何回か犯してしまった。粗相をすると焼酎のいっき飲みから強制的にリスタートとなるため文字通り命に係わるのである。

さて、ここでページ数を一気に稼ぐため一連の学祭ストームを文字おこしして皆さんに

体感してもらおうと思う。くどいようだが途中で嘔むとエンドレス焼酎地獄となる。

みなさん学祭お疲れさまでした!! 宴もたけなわですが、ここでストームいかせていただきます!!

いよっく!! (合いの手)

・・・ぐびぐびぐび(飲んでるふり)

押忍!! 香川県立三木高等学校出身!!

めいもくん!!

※基本どこ出身でも名門と合いの手を入れてもらえるが、なぜか指宿高校だけは開聞岳にちなみ、かゝいもくんと変化する。

河合塾大阪校一年経由!!

おつかれさくん!!

鹿児島大学農学部生物資源化学科生命機能化学コース三年、鹿児島大学混声合唱団^ホ・リフォニー・コール主将の串田達治です!!
よろしくお願いします!!

拍手!!

大正四年、第七高等学校造士館、第十四回
記念祭歌北辰斜に巻頭言!!

いよっく!!

流星落ちて住む処

橄欖（かんらん）の実の熟るる郷

あくがれの南（みんなみ）の国に

つどいし三年（みとせ）の夢短しと

結びも終えぬこの幸を

或いは饗宴（うたげ）の庭に

或いは星空（せいや）の窓の下に

若き高ろう感情の旋律をもて

思いのままに歌い給え

歌は悲しき時の母ともなり

うれしき時の友ともなれ

いざや歌わんかな 北辰斜めを

いざや舞わんかな かの国土の舞を

アイン、ツヴァイ、ドライ!!

…いかがでしたか？

ここまで無事唱えられたらみんなで♪ほくしんなめにさすところ〜と合唱が始まるのだが、酩酊状態でこれを全部囁まずに大声で叫べる人が日本全国どのくらいいらっしゃるだろうか。NHKのアナウンサーでも相当練習しないと無理じゃないかと思うのだが。急性アルコール中毒で救急搬送されなくてよかった。のどを器用に動かして飲んでいるふりがしれつとできた二十代の自分の演技力に



鹿大入学前後の時期に撮影されたと思われる私と母

あらためて感謝したい。

ちなみに余談だが、私は大学に入るのに一年を要したのと同様に出るのにも同じく一年を要した。したがって平成十七年に何とかかんとか卒業し、前号で述べたとおり三重県の乗馬クラブに就職した。それにしても卒論発表十分前のぎりぎりまでパワーポイントで発表シートを作成していたようないかげんな私がよく内定をもらえたものだ。まわりの真面目な就活生が何十社と面接を受けている中、リクナビと呼ばれた就活支援サイトに「馬」とひとこと入力して一番上に出てきた企業に申し込んだらあれよあれよと最終面接まで行ってしまった。たまたま運がよかったのだと思うしかない。就職して一年後に後輩と結婚し、平成十九年に長男が誕生。次いで平成二十一年、次男の出産を機に土日休みのない乗馬クラブを辞め、妻の地元である久留米市

へ引越し&転職し現在に至る。

その長男が今年高三となり、まもなく大学受験がひかえている。小さいころから大の虫好きで、小学一年生の作文に将来は「むしはかせ」になりたいと書いて以降まったくブレずに昆虫採取・観察・育成・標本作りを趣味としている。ひよつとすると私の競馬に対する熱意より上かもしれない。昆虫学研究室がある国立大農学部を志望しているが、はたしてどこに進学してどういった学生生活を送るのだろうか。まあ今の学生さんたちの飲み会はずっとスマートだと思うけども、くれぐれも変なサークルにひっかからないようにね。

☆鹿大時代思い出シリーズ三部作無事完結☆



(福岡県土地家屋調査士会 久留米支部
副支部長、炉ばたセイ談庵主の初孫)

『出水喜多会の活動について』

白男川 孝仁



その1『地方創生』について

令和7年の参議院議員選挙の最中の寄稿であるが、争点のひとつとなった『地方創生』について拙い話をした。

選挙戦での『地方創生』については、地方での事業収入の可能性について多くを語られていたようだが、本来、収入利益の面ではなく日本の伝統芸能文化事業に大いに目を向けて頂きたいものだと、考えている。

かつて入来で開催されていた『薪能』など、その最たるものである。

筆者は、梶原宣俊師かじわらのふとしの誘いを頂き炉ばたセイ談4年目の新参者であるが、梶原師の能・謡曲二十五年についてご紹介しよう。

令和7年で、師は七九歳となられるが、昨年来体調を崩され、炉ばたセイ談の寄稿をはじめ、出水市文化協会の理事や、鹿児島謡曲連合会の幹事まで、公的なお役目をご辞退され、自宅で静養されている。

能楽との出会いは、五十一歳の時能楽堂のある福山市で、喜多流能楽師大島政允氏まさみづに師事された事に始まるが、たった6年で『喜多流謡教士免状』を取得された。

熊本県芦北町で毎年『喜多流薪能』が開催され我々弟子達も連れて行って頂くが、現在は大島政允氏の長男輝久氏てるひさや衣恵様きめえはTVでも御活躍中でいらっしゃる。

その2『鹿児島謡曲連合大会』での活躍

鹿児島謡曲連合会の会報『風姿』第2号に

喜多流・出水喜多会（梶原宣俊）の幹事活動の記述が見られ、翌年の第56回鹿児島謡曲連合大会に、梶原師の鬼界嶋『独吟』と記載がある。平成19年のことである。

また、平成27年の『第30回国民文化祭』の『能楽の祭典』にも、梶原師と國安兄弟子の『箴』、『敦盛』の記録が見える。

実は、筆者は俳句活動がもとで梶原師と出会うことになるのだが、それまでは『俳句』も『能』も全く無縁の生活であった。

出水市教育委員会の方々が、『第30回国民文化祭』のポスターを持参して、『出水市が俳句大会の会場に決まったのでご協力下さい。』とのことであった。

俳句など作ったことはなかったが、出水市の吟行バスで鶴の観察センターなど見学して俳句大会へ初投句も試みた。

予想通りの残念な結果であったが、入選し

た高校の同級生から、『俳句会』なるものに誘われた事が大いに幸いであった。

出水市の『夕鶴俳句会』は、毎月一回第三水曜日に中央図書館で開催されているが、鹿児島から御指導に見える俳句結社『河鹿かじか』のかわむきまつら淵脇護主宰の教えが素晴らしく、その後楽しい勉強に明け暮れる日々が続くこととなる。

数年後、俳句会の学級長になると出水市文化協会の委員としてお役目を頂き、新年会で『能楽の謡い』という聞いた事もない分野で活躍の梶原宣俊氏との出会いがあった。

そして、翌年から『夕鶴俳句会』にご加入頂き、その後筆者も『能楽の謡い』を勉強させて頂く運びとなった。

その3 入来院家の活動について

梶原師の凄いところは、鹿児島謡曲連合会第5号会報『風姿』にご紹介のあった『入来院能』に強い興味を持たれ、入来院貞子様と

は御会い出来なかったが、鹿児島謡曲連合会・前会長の中西喜彦先生が編集長をされている『炉ばたセイ談』に長年寄稿をされ続けていた事である。

『風姿』第5号は、平成21年10月30日の発行であるが、第一面全面で『第7回入来薪能』の御解説を入来院貞子様がなさっている。この御解説を入来院貞子様がなさっているのは是非とも写真掲載をお願いして皆様にご覧になって頂きたい。(別添)

また平成26年の『風姿』第10号には、現在『炉ばたセイ談』編集担当の下土橋渡氏の御寄稿が記載されているので紹介しておく。

『入来薪能と鳥追舟』

下土橋 渡

夫で庶流入来院当主の入来院重朝氏の定年退職に伴い、平成6年夫と共に東京から薩摩川内市入来に移り住んだ入来院貞子さん

(平成23年5月死去)が、先祖の渋谷氏が関東から下向して750年になるのを機に、地域興しグループとその支援会の人たちと、東京から観世鍔仙会一行を招き入来薪能を開催したのは平成12年のことでした。

地域興しグループも支援会グループも能にはずぶの素人でしたが、第1回の薪能を皮切りに第2回、第3回と成功させていきました。

第4回を開催することになった頃、貞子さんは地元の薩摩川内が舞台になっている『鳥追舟』という謡曲があることを知ります。ぜひやりたいと思いますが、経費負担が限界ぎりぎりのところにきていました。

しかし『鳥追舟』の開催を決心。場所も市街地のサンアリーナせんだいに移し、平成14年9月7日、入来薪能『鳥追舟』が実現します。

貞子さんのエッセイに次のようにあります。―今までの曲よりワキツレと子方の2名が増えるばかりでなく、ワキも上級な人でなければならぬということ、京都の先生をお願いする。ハタラクというお手伝いも1人増え費用は相当かかるのだが、後々にも川内市の記録に残ることを考えれば、ここは頑張るしか仕方がない。

貞子さんが亡くなった今、『鳥追舟』の開催は後々に残る貴重な記録になっています。

入来新能『鳥追舟』の開催が契機の一つになり平成16年に、九州新幹線川内駅前に、能『鳥追舟』の里の碑が建立されました。

(元九州職業能力開発大学教授)

その4最後に

現在の出水喜多会は、筆者と高校3年生の山下凛さんの2名で活動している。



出水喜多会（左より筆者、梶原宣俊師、山下凛さん）

令和二年に、文化庁支援の伝統文化親子教室が出水市で始まり、翌年山下凜さんが中学三年生で弟子入りして下さった。

梶原師の体調が思わしくない中で毎月2回の勉強会を続けて頂いている。

勉強熱心な山下凜さんは女生徒ながら強吟が得意で、堂々たる謡いっぷりに梶原師も目を細めていらつしやる。

今年の10月の鹿児島謡曲連合大会では、二人で『舟弁慶』と『安宅』^{あたか}を発表の予定であるが、大学進学を控えている山下凜さんの今後を御心配下さっている梶原師に対し、『大学生になっても続けますので、先生！お元気になって沢山の謡いを教えて下さい！』と胸が熱くなる事を言ってくれる。

体調ご不調ながらも出水喜多会の活動継続を切望していらつしやる梶原宣俊師の御快復を願いながら、師の期待に応えたい。

しらおがわ・たかひと

出水市文化協会 副会長
俳句結社河鹿 無監査同人



別添

風姿

第5号

10月30日
発行

鹿児島謡曲連合会

事務局

〒891-0112 鹿児島市魚見町155-10

電話・FAX: 099-268-7341

E-メール: nakanisi@posynapse.ne.jp



かがり火に照らされ能「巴」の幽玄な世界（写真撮影・下土橋渡氏）



5年ぶり山城に幽玄美

第7回入来薪能——入来院 貞子氏

宵闇の迫った中世の山城を背にした能舞台の静寂をかすかな笛の音が、そして裂帛の鼓が貫く。篝火の炎が風に揺れて、荘厳な舞台を照らす。

凛とした舞台に「巴」の舞が登場して修羅物の巴の舞台が始まる。

この清色城址で行われる入来薪能は7回を迎えた。平成10年の「淡谷氏下向750年イベント」の成功に続く町おこしを模索していたその年の秋、在京中に私たち夫婦がご自宅に何って謡曲を指導して

いただいていた鏡仙会の若松健史先生が、長崎の諏訪神社で諏訪を舞うとお聞きした。私はこれだと思った。そして「先生、長崎までいらっしゃるなら鹿児島にもいらしてください」と頼み込んだのが始まりだった。

忙しい日程を縫ってご来鹿いただき、この清色城址を案内して会場にどうだろうか」と伺った。そして先生から「ここは最高の舞台になる」と折紙をつけていただいた。

実行に踏み切ろうにも、実際の作業に当たる土地の者は誰一人能を観たこともない。百聞は一見にしかずと、岡山の最上稲荷で薪能をなさる先生の舞台を観ることにした。ワゴン車に町の企画課長と職員、大工さん、照明音響担当者と一緒に花水木会計の6人で早朝出発。1泊の見学を

強行した。そして舞台や照明など、実行に必要な知識を得て、第一歩が踏み出せたのだった。

第1回は「天鼓」。第2回は「巴」を予定していたが雨で中止。それから「清経」「鳥追」「屋島」「忠度」と基本的に毎年続けてきた。

しかし、個人的に赤字を補うのには限界が来ていたことと、私が発がんしたため5年間の空白となつてしまった。今回、再開できたことは本当に幸せなことだと思う。

ご来場の方々は異口同音に「素晴らしい」「感激した」と言われる。実際に「驚いた」なれば、日本の伝統芸能の持つ芸術性に打たれるのだ。そして私はその意義をかみしめる。ただ赤字は入場者数に反比例するので今年も結構な額を背負う羽目になつてしまった。

この入来薪能が赤字に悩まされることなく大らかに企画できるような仕組みができないものだろうか。この地の行事として、より多くの方々に感動を与え続けることができるようになることを切望している。

禅に御縁を頂く

中山とし子（浄心）



（一）

私は一九歳（一九六九年）から坐禅を始め、二十四歳の結婚と同時にきっぱりと止め、以後四十年間禅との御縁はありませんでした。六五歳の時ある再会があり、あれよあれよという間に再び禅の世界に引き戻されました。

そして、坐禅は勿論、何名かの御老師様方にお目にかかる機会を頂き、遅ればせながらある程度の禅書を読む機会にも恵まれています。又、長崎県諫早市にある妙本寺様を絡子把針（らくすはしん）の習い初めとして、愛知尼僧堂で絡子の把針を参究する御縁を頂き、更に宇治の興聖寺で御袈裟の把針を約二年間参

究し、現在、二〇二五年五月、自宅にて坐禅仲間の皆様と絡子の把針に励んでおります。
（註：絡子（らくす）とは、仏教徒が首からかける仏具で、御袈裟の省略されたもの）



絡子

一度離れた禅に四十年後に再び御縁を頂き、そして自分の根幹に禅の考え方を据えるようになった宿縁について不思議に思います。七五歳の今人生を俯瞰してみると、すべてはこうなるように決まっていたことが自然と成っただけのことだ、というゆるぎない確信に行き着くのです。一九歳の若い娘が坐禅に興

味を持つようになった因縁について、改めて考えてみたいと思います。

(二)

私は一九六九年四月、デパートの店員から勤労学生へと舵を切りました。奈良県にある靴下製造会社に転職し、短大の保育科で学ぶ学生となったのです。工場に隣接する女子寮に住んでいましたが、その頃、寮友の中に大変気になる女性がいました。彼女の話し方や仕草のすべてが芝居じみていて、あからさまな作為に見えました。私はそこに嫌悪感を抱いていました。彼女は同じ短大の同級生で、年齢は一つ年下のSさんでした。Sさんは美人の部類に入るでしょう。二重の強い目つきやニツコリ笑った口元はゆるぎがなく、芯の強い女性をうかがわせるのに、幼い子がやるような、えくん、えくん、といった泣きまね

や、いやん、いやん、といった甘えた猫のような異常な所作が日常で、それは、男性にも女性にも、年上にも年下にも発揮されました。その明るさと幼さの演技で、寮生たちの人気を得ているようでした。彼らは面白がっていたのでしょうか……。私はSさんの、自分を偽って恥じない図々しさに怒りが湧きました。私の欺瞞への潔癖すぎるこだわりは、次第に、Sさんだけでなく彼女に親しんでいく寮生も許せない、こんなことがまかり通る世の中も許せないとなり、しかし、周囲をあからさまに非難する様子を見せれば子供っぽく見えるのは自分の方だ、ということも自覚していました。自分の正しい見方を理解できないのなら話しても無駄と、時間に追われる中、自ら孤立して行きました。

寮友たちと正面から向き合わず、若い娘らしい明るさもない生活を送っていたある朝、

新聞の小さな記事が目にとまりました。大和高田市の商工会議所で、禅僧の方がお話されるというのです。私は出かけました。そして、次の週から毎週土曜日の参禅に通うことになったのです。片道一時間半かかる奈良市にある三松寺でした。ここで、私は最初の禅のお坊様に接することになったのです。故皆川英真御住職でした。

禅は、一言でいえば、自分を飾ったり偽善や露悪に陥らない率直でありのままの生き方を説いていて、それはまさに私が求めていたものでした。お寺までの遠距離も、坐禅の辛さも気になりませんでした。私の居場所はここだと、自信が体中にみなぎるほどの感動でした。一九歳で入った禅の道は、以後の私の考え方、行動の拠り所のすべてを決めたと言っても過言ではないと思います。

やがて短大を卒業、保育士となり家庭に入

り、子供も成人した三五年後、Sさんと私は再会しました。彼女は、普通の大人の女性になっていました。昔、私が彼女の異常な行動に参っていたことを知っていました。自分がそのように演じていたことも自覚していました。そして、思いがけないことを言ったのです。幼い頃実母が亡くなり、数年後継母を迎えた時、継母に受け入れられるために幼い子を演じていたということです。後で産まれた弟に継母を奪われまいと、機嫌取りをしていたというのです。社会に出ても周囲から受け入れられるために、保護の必要な子供のようにふるまったということです。そして、離婚を経験し、介護士として働きながら二人の子供さんを育て上げていました。率直に話す彼女の言葉を聞いて、当時の彼女の行動にも又違った思いが湧いて来たのです。彼女は彼女で必死だったのだろうな、と慈しみの気持ちで湧

いて来ました。その時彼女が、都合の悪いことも隠さずありのままの自分を語ってくれたことで、私たちは心の底から打ち解けてお互いの事を語りました。

ともあれ、私の発心の直接の契機は、Sさんの自己欺瞞に対する違和感だったと思います。私は特にそこへのこだわりが強かったために、表面だけ、口先だけ、に簡単に騙される周囲にも腹が立ちました。その怒りを鎮めるための何かを、真剣に探さざるを得なかった。だからこそ禅に出会えたと思います。いや、実はこうなるように、本人たちの与り知らぬところで準備されていたSさんとの出会いだったのかもしれない。

上下関係も男女の分け隔てもない人々に囲まれる雰囲気は気持ち良く、自分に合っていたのですね。坐禅に夢中になりました。しかし、五〇年経った今はこうも思います。

本来の自分で生きられる人は案外少ない。それができる人もいるが、できない人の方が多いのではないか。それを自覚し、それに向かつて努力する人も一握りだ。特に自分を守りたいとき、人間は意識的に自分を偽り、相手におもねた都合の良い表現を使いがちだ。真意は胸におさめて表面的には相手に合わせる。このような人の方が人に好かれることが多く、Sさんは私よりも後輩たちに慕われ、無口で軽口の一つも言えない私は、近寄りがたく恐れられていたに違いないと思うのです。

若い頃の私は、漱石の影響を強く受けています。『虞美人草』には、甲野さんの継母「謎の女」とその実の娘「藤尾」、そして率直と善意の人「宗近くん」を登場させ、甲野さんに次のように言わせています。

「僕の母は偽者だよ。君等がみんな欺かれて
いるんだ。母じゃない、謎だ……」
（母の、家を

出てくれるなと云ふのは、出てくれといふ意味なんだ。財産を取れと云ふのは、寄こせと云ふ意味なんだ。世話をしてもらいたいと云ふのは、世話になるのが厭と云ふ意味なんだ。

甲野さんは、口先と真意の違うこの義母に長く苦しみます。漱石はこの小説で、本来の面目で生きる人間と裏表を平気で使い分ける人間を対比させ、最後は、計算のない本来の自分で生きられる宗近君の友情によって、我欲と欺瞞は衝撃的な崩壊の結末を迎えます。何回読んでも最後のところで鼻の奥がツンと痛くなり、目の前が曇るのです。先に書いたSさんも、やはり結果は小説の示すように崩壊していました。しかしSさんのえらい所は、その後シングルマザーとなって二人のお子さんたちを立派に育て上げたところですよ。

(二)

時は過ぎて、二〇一五年八月。六五歳の私は、岐阜県各務原市の東海中央病院にいました。高校時代のクラブの先輩、J子を見舞うためでした。二〇一四年に末期ガンの宣告を受けたJ子は、わずか一年半の間に緩和病棟を選ぶ事態に陥っていました。J子とは、私が六二歳の時に四〇年ぶりに再会し、姉妹のように互いの住んでいる土地を訪ねたり、その頃抱えていた共通した悩みである、親の介護に伴う身内との葛藤を共有した仲でした。親が心配で頻繁に帰る私は、周囲から遺産狙いと汚名を着せられていました。

二〇一五年八月九日、抱えきれないほどの果物を買って訪れた病室で、J子は横になったまま迎えてくれました。彼女の六六年の厳しかった人生がそこに集約されていました。死の床にあって朦朧とした状態であるのに、切羽詰まっていた私はこれが最後と思えばこ

そ、我が身内の「事」をハッキリさせるための方策を彼女に尋ねずにはおられませんでした。法的手段に訴えるべきかどうかを相談したのです。今思えば何と言う冷酷な人間だったか！ 彼女は真つ直ぐな性格から、そのことで兄弟と裁判を起こしていました。しかし、勝ったところで徒労に過ぎなかった、だから「捨ておきなさい」と、苦しい息の下から厳しく警告して下さいました。これが後の私を救ってくれたと思います。

人は死ぬ。彼女と話すのはこれが最後、と確信しました。抗いようもないこの事実を、全身で受け止めねばなりませんでした。人は死ぬ。生きている間にできることはやり、会いたい人には会っておかねばならない、とわかりました。翌日、JR高山本線の蘇原駅に着いた時、このまま自宅に帰るのはやりきれず、瞬間的に反対方向の列車に乗りしました。

四〇年前、飛騨高山をもっと遡った所にある山寺で坐禅をしたことを思い出し、せめて、未来を見つめて生きることによって一生懸命だったあの頃に戻りたい、山寺（正宗寺）を外から眺めるだけでも、今の荒んだ気持ちが一時的にでも慰められるのではないか、そんな気持ちからでした。

四〇年以上経っているのに、走るタクシーの窓から、次第に当時の山川がよみがえり、正宗寺が昔とほぼ変わらない佇まいで田の中に存在していました。原田道一東堂は在寺していらつしやり、どこの誰ともわからぬ人間を、さあ上がきなさい、お茶だお菓子だと温かく受け入れて下さり、それまでの重苦しい気持ちたちが急速にどこかに飛んでしまいました。この再会への機縁となったJ子の死が、禅への再縁へと導いてくれたのです。（東堂とは、住職を退いてその寺の隠居職となったお坊様）

この時以来、原田東堂はこれを読んでみなさい、これはどうだと言わんばかりに、禅の思想を説いた書籍類を送って下さり、脳が栄養を喜ぶといった感じで、知らず知らずのうちに、禅書を読むことが葛藤をかかえていた私への教化となっていたのです。

二〇一六年の早春、アメリカのアイオワ州にある龍門寺の御住職、ワインコフ彰顕老師が書かれた“Zen Seeds for Fallo Ground”が原田東堂から届きました。シンプルな英語で書かれており、何より文章のリズムが、自分の呼吸とピッタリ合いました。面白くて、辞書を引きながらただ自分の楽しみのために読んでいたのですが、実はその内容は、その時の私に必要なものだったと思います。必要なものが必要な時にやってくる、この不思議な符合は、自分がこの大自然の中で生かされている生物の一つであるという証。翻訳が終

わってしばらくしてから、この事を実感したのです。

秋になって、著者のワインコフ老師が、永平寺での瑞世（ずいせ）のためにお弟子様方を随行して来日されることがわかりました。

私は迷うことなく滞在先の熱海まで会いに行きました。英語はシンプルでも、仏教のことを知らない私には、日本語訳が仏教の教理と合っているのかを始めとして、僧侶の日々の行持に関することなど、質問が山ほどあったのです。当然、四、五時間で終わるはずはなく、以後eメール上を数十回もの質問と答えが往来しました。ワインコフ老師とのこの時の出会いが、『禅の種まき』の翻訳出版、以後の龍門寺のニュースレターや『龍門寺の四季』の日本語翻訳出版に繋がりました。

翻訳に際しては英語力も重要ですが、その分野の十分な理解と、何より日本語力が重要

と考えます。原本の英文はシンプルでも、私に仏教の知識が乏しいのでどのような日本語で表現すれば良いのか、それが問題でした。

独特の禅語を日本語表現に転換するのに大いに役に立ったのは、鈴木俊隆老師の

『Zen Mind, Beginner, s・Mind』 藤田一照

訳、松永太郎訳の二冊です。仏教思想を英語で表現してあるものを、更に日本語の仏教書に翻訳してあるので、実際的でした。専門性の高い仏教の語彙を古びた頭にインプットし、メタファーの意味するところを掴むのに脳をフル回転させねばなりませんでしたが、新しい知識への好奇心の方が勝って、苦勞とは思いませんでした。何も知らなかった乾いた脳に水がしみこむ勢いで、禅の思想が入って来ました。この翻訳の為の参究の過程は心が躍るくらい楽しかった為、その頃抱えていた身内との行き違いから来る苦しい葛藤と不信感

を、一時的に忘れることができたのです。その上、翻訳の為の勉強でしたが、読んだ本やお坊様方から教えて頂いた内容が自分への教えとなり、いつの間にか、私の菩提心をも呼び醒ましてくれたのです。

(四)

二〇一七年（六七歳）の初夏、坐禅を再開して間もなくの三松寺の夜の坐禅中のことです。突然上の方から「逆の立場でなくて良かったではないか」という声が明確に聞こえました。はっと、眼を開きました。あまりにも明瞭な声だったため、最初は天の声かと神秘的な気持ちになりました。が、自分の内なる声だったということが今はわかります。自分を相手に転化させた考え方は、その時まで思いつかなかった思いがけない発想の転換でした。相手のアンフェアなやり方を許せない

と思っっている間は、自と他が別々にあるわけなので苦しみは去らない。

一方、ここ数年参究してきた禅仏教では一元論を説いていて、自と他が別々にあるのではない。自と他は一つだ。相手がどうであろうと、大事なのは自分の行動だ。「他は自であり、自は他の中にある」という事は、相手の行為を憎めば憎むほど自分が軽くなるように勘違いするが、実際はその反対で、他を憎む自分を心の深い所で許していない。だから苦しい。他を許すことは自分をも許すことである。仏教の智慧を授かっていたからこそ、このような立場の転換に発展したと思います。

改めて、自分はどうかと足元を見てみた時に、相手を許す、許さないは自分の仕事ではないような気がしました。それは天地宇宙に任せればよい。自分は正々堂々としていても良い。そうか、これが只管打坐の坐禅なのだ。

現実的には損な役回りだったかもしれないが、転ずれば、天に恥じるようなところに足を踏み入れなくても済む役回りだったことをまず喜ぶべきだ。これが分かった時、守られた、という深い安堵が感じられました。それまで怒りでガチガチに固まっていた身体と胸のつかえが、坐蒲の上ですうっと急速に取れていくのが実感されました。「損は得、得は損」とはこういう事かと、今は、仏教の智慧を授かった事が有難く思われます。

あれ以来、坐禅中に声が下りてくることはなく、雑念と妄想から離れようと、調心調息に集中を試みる繰り返しです。ただ一つ、最近発見した事です、坐禅に案外良いのは、故郷の山川をドローンの上から眺めているイメージです。幼い頃、きょうだい一緒に駆け回った故郷の山川は、何があっても、やはり良いのです。

(五)

後に、稲盛和夫氏の著書の中に『金剛經（こんごうきよう）の第五八則「剛經経賤（ごうきようきようせん）」にある法の言葉を見つけました。〈災難や苦難に遭ったら、嘆かず、腐らず、恨まず、愚痴をこぼさず、ひたすら前向きに努力を続けていく。これから将来、よいことが起きるためにこの苦難があるのだと耐え、与えられた苦難に感謝すること〉というのです。苦難に感謝することはすぐにはできません。人間はぎりぎりまで追い込まれて初めて発想を転換するに至ります。私は救われました。仏教では一つの事象も見逃すことなく、ちゃんと教典の中に手当があり、驚かされます。

この世の一人一人の役回りは、一体誰が、人間の一生のどの段階で決めるのでしょうか。

「謎の女」も「藤尾」も、昔も今も私たちの身近のどこにでもいるし、相手や場面によって嘘をついたり、正直者になったり、人は自由自在に面（おもて）を付け替える動物です。周囲の毀誉褒貶に一喜一憂しては、本来の真の自分に気づくことはできません。禅語に「随所に主となれ」とあります。これは周囲にマウントを取ることはありません。「如何なる場合でも何物にも束縛されず、主体性を持った自分自身の主人公となる」生き方の事です。そのためには、真の道を求める絶え間ない正しい修行が必要となります。過去ではない、未来でもない、「今ここ」をありのまま精一杯生きること。その積み重ねが、本来の自己への気づきへと繋がって、いつの間にか恐れや傲慢や自己卑下から解放される禅的世界観を手に入れることになるのです。

（奈良市在住・エッセイスト）

旅は道連れ



奈良迫 英光

2024年のインバウンド客数は、コロナ前を上回り、3560万人余りと、過去最高になった。日本人の海外旅行者数を大きく上回る。特に東アジアの中国、韓国、台湾、香港からが8割を占め、ここ数年は欧米系の伸びが顕著である。「四季折々の美しい自然」、「日本食の無形文化遺産登録」、「祭りや伝統文化」、「安全・安心な国、秩序ある国民性」等日本の魅力が浸透していることなどがあげられる。夕刻甲突川べりを散歩していると、外国人夫婦が仲良く腕を組んで散歩していたので声をかけると、オーストラリアから来て外資系ホテルに4泊しながら世界遺産や鹿児島

島市内の街歩きを満喫していると言う。海外からのクルーズ船は夫婦連れがほとんどで、長い船旅を楽しんでいる。

鹿児島もクルーズ船の人氣が定着し、今年は過去最高の入港が予定されている。

ところで先日初めての海外旅行で、ヨーロッパを旅した退職間もない夫婦を訪ねた。土産話を聞くためであつたが、道中の話になると奥様が開口一番「二度と主人とは旅行には行きません」と不機嫌な様子、わけを聞くと夫と旅行に行っても楽しいことは一つもなかった。「朝早くからごそごそ起きだして、日本宿に泊まったかのようにお茶を催促する」、「観光地では、見学することもなくバスから下車せず寝ている」、「フリータイム中に二人でショッピングに行くと、退屈そうで早く済ませろと急がせる」、「夜は日本から持ち込んだ焼酎を部屋で晩酌して、外食に行く気配も

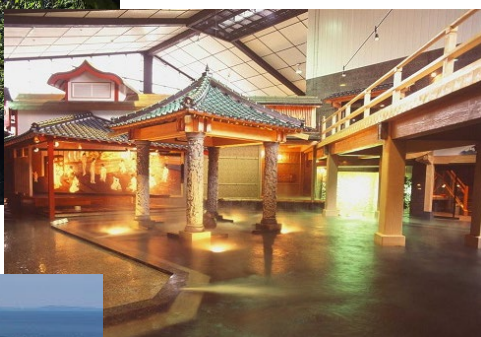
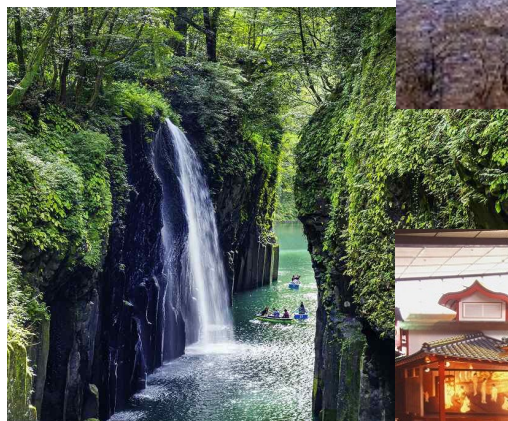
ない。」「風呂から上がり余生の過ごし方を語りあいたいのにいびきをかいて寝ている」等々日本での生活とほとんど変わらず、異国情緒を楽しむ気配も感じられなかったという。奥様の怒りがよく理解でき、これでは何のために海外旅行に行ったのか、子育ても終わりとやっと二人の時間が取れたのにと、嘆きの言葉ばかりについて相槌を打ってしまった。「夫婦の旅」は、道中の会話の時間を深めることで、お互いの今までの苦労に感謝し、これかも助け合い生きていくことを確認し合い、絆がより深まる機会にもなる。夫が妻の考え方を理解し、歩調を合わせられるかが楽しい旅のポイントではないかと思う。

研修会に講師として参加する機会が多いので、参加者によく質問することがある。「退職したら誰と旅行をしたいですか」と。年代で多少の違いはあるが、男性の8割は妻と行

きたいと手をあげ、女性は子供、友人と続き、御主人との旅行を望む人は3割にも満たない悲しい現実がある。特に60代を過ぎると女性には夫との旅行を敬遠している。年齢を重ねることに女性は自立心が強く、自分の時間を大切にし、積極的に行動し旅を楽しみたいという傾向が表れている。

また、夫婦旅行の行先は妻が主導権を握っている。日頃の趣味や買物などの消費行動にも表れており、デパートや昼間のレストラン等を見ると、女性の姿であふれている。男性は定年を迎えると、家に引きこもりがちで、妻への依存心が一層強くなる傾向がある。そのことで自由を望む女性が一緒に旅を望まない要因ではないだろうか。

一方高度成長期に粉骨砕身働き、社会を支え、バブル崩壊期には人事面で苦勞を強いられた世代の男性はわがままが多いのも現実で



写真提供：クラブツーリズム

ある。自分が家族を支えたという自負心が強い世代であるが、これからは第2の人生を楽しむ切り替えが必要で、世の中の仕組みやものの考え方についても弾力的にならないと生きて行くことが窮屈になる。

先日、ドルフィンポートで、桜島を眺めている長野県から来たというご夫婦にお会いした。痴呆症の妻のために、耳元で話しかけながらゆっくりと車いすを押している夫の姿に涙腺が緩んだ。鹿児島島の印象について、多様な温泉、桜島の景観、食べ物の美味しさ、人がとにかく優しく親切といていた。心の温かさが残っている鹿児島にはほっとした思いであった。

今消費の鍵を握っているのは女性であり、女性に支持されない地域や商品は淘汰されていくのが世の流れである。旅行においても、自分の我を通すのではなく「牛に引かれて善

光寺参り」のごとく妻の行動に合わせる器量が欲しい。

あらゆるものがデータ化され、ITで一瞬に旅先の様子を検索ができる時代である。しかし旅に出てみると、食事、季節、おもてなし、人との出会い、心の持ちようで旅行の印象は変わる。1年に数回は旅に出て、国内外の観光地を訪ねてはいかがですか。美しい日本、悠久の歴史を持つ国々、多くの人々との触れ合いが、夫婦を目覚めさせ、新たな生きがいをもたらす。

「旅は道連れ、世は情け」、ゆっくりと夫婦で人生を楽しみたいものである。

(鹿児島県観光立県推進会議会長)



郷中（ごじゅう）教育

― 歴史を訪ねる旅（19）

下土橋 渡



少子化が進み、子供たちの異年齢交流の減少や地域との結びつきの低下が叫ばれるなかで、異年齢集団活動による青少年育成の試みが全国各地で行われている。

鹿児島には、『郷中教育』（ごじゅうきょういく、あるいは、ごちゅうきょういく）という薩摩藩伝統の縦割り教育があった。郷中とは、『方限』^{ほうぎり}と呼ばれる区割りを単位とする自治組織のことで、今でいえば町内会単位の自治会組織と考えればよいだろう。当時、鹿児島の下には数10戸を単位として、およそ30の郷中があったといわれている。

一、『泣こよかひっ飛べ』

1947年〜49年生まれの、いわゆる団塊の世代である筆者が小学校、中学校時代（昭和30年代）には、鹿児島県内の田舎にもたくさんの子供たちがいた。お兄さんやお姉さん、弟や妹たちと連れだって遊びにいくと、田んぼに用水路がある。

まずお兄さんたちが飛び越えてみせる。つぎに、年下の者が飛ぶのに躊躇していると、周りの者が『泣こかい、飛ぼかい、泣こよかひっ飛べ』と囃し立てる。これは、困難に出会った時はあれこれ考えず、とにかく行動しろという薩摩人の思考法をあらわす言葉で、今にして思えば、郷中教育の名残だった。

また、鹿児島県内では、たとえば神社の掲示板などに、①負けるな、②嘘をつくな、③弱い者をいじめるな、という3つの言葉が大きな字で掲示されているのをよく目にする。

これもまた、郷中教育の教えを今に伝えている言葉である。

二、外城制度と薩摩藩の教育

薩摩は武の国として知られたが、一つの城楼も天守閣もなかった。鹿児島市内にある鶴丸城は、城という名はつくものの、単純な構造の屋形造りの城で、世人は『お屋形』と呼んだ。

これは、一つには裏に城山があつて天然の要害となつていたことにもよるが、『人は城人は石垣、人は壕』という標語があつたように、人間こそが城砦であり、人間こそが塁壁であり、人間こそが壕渠であると考え、防御の根本を人間の配置においたからだつた。

すなわち、薩摩藩は、鶴丸城を本城とし、領地を外城（とじょう）と呼ばれる 113 の行政区域に分け、武士団を分散してそれらの領地内に住まわせ統治に当たらせた。麓集落（ふもと）と呼ばれる



麓の風景（下甕手打の武家屋敷通り）

ミニ城下町が形成され、その中心に地頭の居館である地頭仮屋が置かれ、ここで外城の行政が行われた。現在でも県内各地でその面影を見ることが出来る。

したがって、藩においては、士民に領国の防衛意識を高揚させるための教育と、中央集権の実をあげる政治との連用が必要だった。教育と政治は密接に関係し、いわば政教は不可分の関係にあった。

薩摩藩における教育政策の一つに、第8代藩主・島津重豪しげひでが設立した藩校・造士館の制度があったが、藩政の上に顕著な効果を示したのは郷中教育だった。

交通未発達時代に、日本列島最南端のいわゆる僻地が、多くの偉人傑士を輩出し、明治維新の最も有力な推進力となり得たのは、一に郷中教育の制度が全薩摩藩に広がり、その精神が徹底していたからに他ならなかった。

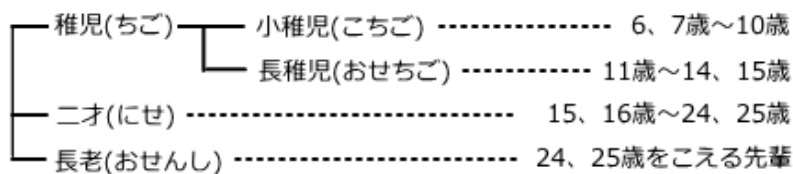
三、郷中の生活と教育

郷中は、青少年を『稚児ちご』と『二才にせ』に分けて、勉強・武芸・山坂やまざか達者たつしや（今でいう体育・スポーツ）などを通じて、先輩が後輩を指導することによって強い武士をつくろうとする組織だった。

稚児は年齢によってさらに、小稚児こちごと長稚児おせちごに分けられ、稚児のリーダーとして稚児頭ちごしらがいた。また、二才のリーダーとして二才頭にせかしらがいて、二才と稚児の面倒をみた。

稚児と呼ばれる武士の子どもたちは、毎日早朝、郷中内の先生の家へ走っていつて本読みを習い、家に帰ってくると朝食までそれぞれ本読みの復習をしたり家事を手伝ったりして過ごす。

朝食がすむと今度は、馬場と呼ばれる広場や神社の境内などに集って、馬追いや降参言わせ、相撲、旗とりなどによって身体を鍛え



稚児と二才と長老

る。午後は、共に誘いあつて、先輩や先生の家(復習座元)に集まり読み書きの復習をする。その後、稽古場へ行き夕方まで、剣(示現流)、槍、弓、馬術など、武芸の稽古を行なった。

長稚児たちは、夕方から二才たちが集まっている家(夜話の座元)に行つて、郷中の掟を復唱したり自分たちの生活を反省したりした。武士の子としてよくない行いがあれば二才たちから注意を受け、場合によっては厳しい罰を受けることもあった。

武士の子どもたちは、一



薬丸野太刀自顕流演武 (2009.5.17 東京・東郷神社)

日のほとんどを同じ年頃や少し年上の人たちと一緒に過ごしながら、心身を鍛え、躰・武芸を身につけ、勉学に勤しんだ。年長者は年少者を指導すること、年少者は年長者を尊敬すること、負けるな、うそをつくな、弱者をいじめるなということなどを、人として生きていくために最も必要なこととして教えた。

二才同志は、互いに戒めあい、修身の道に各々自重するとともに、二才頭を中心にして互いに熟議し、郷中に起る一切の問題を処理した。二才たちの手でどうしても処理しかねる時には、長老を訪ねて適宜指導を仰いだ。

このように、郷中教育は、集団のなかでおこなわれ、教師のいない、異年齢によって行われた自治的な教育であったことを特徴とした。

なお、鹿兒島言葉で、大根のことを『デコン』、野菜のことを『ヤセ』、臭いを『クセ』、西郷を『セゴ』などと、約転している。郷中

を『ごじゅう、ごちゅう』と読み、二才を『ニセ』と読むのも、この地方方言の特質による。

また、二才は、ボラなどの魚が二年を経て、ようやく成長魚になったばかりの若魚を意味し、これになぞらえ、一人前の付き合いを認められた若者衆を意味している。

四、郷中のはじまりから成立まで

『郷中』という言葉が使われるようになり、郷中教育が完成をみるのは、江戸時代中期の安永年間（1764～80年）だが、そののはじまりは、戦国時代の伊作島津家（現在の日置市吹上地域の一部）の10代当主・島津忠良（日新公、1492～1568年）が試みた青少年の志操教育にあった。

島津氏中興の祖といわれ、文武兼備の名将だった忠良公は、神仏の崇敬篤く、神仏儒の三教を良く学び、『薩摩学』『日学』を提唱し、薩摩独特の土風と文化の基盤を築いた。その



日新公いろは歌・歌碑（南さつま市竹田神社）

内容は、忠孝仁義を説き、この実践を奨励するもので、48歳から55歳の間に作ったといわれる『いろは歌』にその思想が遺憾なく謳われている。

『古の道^{いじえ}を聞きても唱へても我が行にせずば甲斐なし』ではじまるいろは歌は、郷中教育の規範となり、現代にも大きな影響を与えているといわれる。

日新公は、毎月五、六度、諸子の子弟を城中に召集して、四書の講義をし、『義理ノ咄^{はなし}』『忠義人ノ咄』などを話して聞かせたという。日新公によつてはじめられたこの『咄』の会合の試みは、公の遠逝とともに中断したが、これを新しい形式で復活すべき事情が起きてくる。

文禄元年（1592年）、太閤秀吉が朝鮮遠征を断行すると、薩摩から義久公・義弘公・忠恒公を始めとして一万余騎の精兵が朝鮮に

渡った。戦争が10年に近い長期間に及ぶに至って、後に残留した青少年の風紀が乱れてきたのである。この時、留守居役を任されていた新納忠元は、そのことにいたく責任を感じ、風俗改善を決意する。

この目的を達成するために、忠元は、少年時代に日新公を中心として催された『咄』の会合を思い起こし、青少年たちの間に集団を結成し、その各員が何事に限らず腹藏なく話し会える組織をつくり、これを『二才咄』と名付けた。

さらに、日常守るべき数条の規約を定め、これを『二才咄格式定目』と名付け、実践させた。二才仲間はそれぞれ集団を組織して研磨に励んだが、『二才咄』への出入りは、比較的自由であり、統制のための規律もなく日常生活における成員の行動は、各自の恣意に任されていた。その状態は江戸時代の元禄5年

(1692年)頃まで及んだようである。

しかし、太平になれた元禄時代の華美の風潮に風紀は乱れ、元禄15年頃には、怒涛のごとく蔓延した悪風潮は容易に改まる様子もなかった。そのため、成員の生活・行動は厳しく規律によって制約されるようになり、第4代藩主吉貴公は、宝永4年(1707年)に、『御袖判条々』という布達を出して、二才衆が交友で遠方に行くことを禁じた。

行動範囲に地域的制限を設けたことによって、『方限』という概念が生まれた。すなわち、『方限』は、二才衆の不行跡・喧嘩等を取り締まる目的をもって起きて来たものということが出来る。

ついに『咄相中掟』の条項に、この『方限』の概念が取り入れられ、宝暦4年(1754年)に『稚児相中掟』が出される。この年は、薩摩藩が幕府から木曾川治水工事(宝暦の治

水工事」の命を受けた翌年のことだった。こうした経緯を経て、第8代藩主・島津重豪公の安永年間に郷中教育が完成した。

五、薩摩のエピソード

薩摩出身の軍人・政治家、樺山資紀すけのり伯爵を祖父に持った随筆家の白洲正子さん（1910～198年）は、津本陽さんの著書『薩南示現流』（1983年、文藝春秋刊）に出てくる逸話を自伝で紹介している。

「幕末、指宿藤次郎という示現流の使い手が京都祇園で見廻組に殺された。その時同行していた前田某という若侍はいち早く遁走してしまった。指宿の葬儀の場に、橋口覚之進という気性のはげしい若侍がいて、『お前（おはん）が、一番線香じや。先（さきイ）拝め』
 といって、参列者の中から前田を呼出した。

前田がおそろおそろ進み出て線香し、指宿の死体の上でうなだれていると、橋口は腰刀

を抜いて、一刀のもとに前田の首を斬ったという。首はひとたまりもなく、棺の中に落ちた。『こいでよか。蓋をせい。』」

白洲さんは、何とも野蕃な話であるが、橋口にしても、前田にしても、そうしなければならぬ理由があった。郷中教育を受けた者にとつて、この葬儀の場合は、葬儀というより一種の儀式で、参列者は元より、斬る方も斬られる側も、すべて暗黙の了解のもとにあり、『こいでよか』のひとつですんだのであろうと述べている。

何より卑怯・卑劣をいやしむ郷中教育の教えからして、前田の行為は最も恥ずべき行為であり、そして郷中教育の教えがそれほど徹底していたということであろう。この話に出てくる橋口覚之進なる若侍こそ、樺山家へ養子入する前の祖父（樺山資紀）の若き日の姿だったそうだ。

郷中教育では、『座頭講』という催しも行われた。座頭とは盲人の琵琶法師のことで、座頭を招いて薩摩琵琶を弾かせそれを聴くのである。間断のない文武の講習、身心の鍛錬に対して慰安の油を差し込む催しであった。

日清戦争の連合艦隊司令長官だった伊東祐亨元帥は、降伏を決めて服毒死を遂げた清国・北洋艦隊提督の丁汝昌の遺体を送らせるため、没収した軍艦の中から商船を外して提供した。

その礼節は世界を驚嘆せしめたのだが、大本営は伊東長官のこの独断の処置を不当とし、電報を打ってその故を質した。それに対し、伊東長官はただ一言、『武士の情』と返信したので、大本営はそのまま黙ってしまったそうである。後年、同元帥は、『これも全く琵琶歌によって培われた武士道精神の發揮にほかない』と語られたそうである。

六、現在も伝承されている郷中教育の行事

郷中では、3つの大きな行事が行われている。一に『曾我傘焼』、二に『妙円寺詣り』、三に『義臣伝読み』である。

第一は、鎌倉時代に相模国の曾我兄弟が父の仇討ちを遂げる際、傘を焼いて松明がわりにしたという故事を懐かしみ、孝道の真髓を嘆賞する行事だった。第二は、関ヶ原の戦いで豊臣方として戦った島津義弘公勢が徳川方の敵中を突破し帰鹿を果たした遺徳を慕い、不撓不屈の敢闘精神を練磨するものだった。第三は、赤穂義士の苦衷と遠謀を偲びつつ忠魂の修練に資した。

このうち、『曾我傘焼』と『妙円寺詣り』の行事は現在も伝承されて実施されている。『曾我どんの傘焼き』は、毎年7月下旬、鹿児島市内を流れる甲突川の川べりの櫓に岐阜



曾我どんの傘焼き (2006.07 鹿児島市)

県和傘振興会などから寄せられた和傘を積み上げ火がつけらる。炎が夜空高く舞い上がり、夏の川面を赤々と焦がすと、人々は、五穀豊穡と洪水無災害を祈願する。

また、毎年10月に行われる『妙円寺詣り』では、鹿児島市内から義弘公を祀る日置市伊集院町の妙円寺（現在の徳重神社）までの片道約20キロを歩いて参詣する。

（元九州職業能力開発大学校教授）

【参考文献】

- （1）松本彦三郎著『薩摩精神の真髄 郷中教育の研究』（株）島津興業・尚古集成館、2007年発行）
- （2）白洲正子著『白洲正子自伝』（新潮文庫、1999年発行）

「日本人」について考えてみた

奥村 太



唐突ですが、日々の生活の中で自分が「日本人である。」ということを意識することはありますか？よく、サッカー等の国際大会の時に日本人選手や日本人サポーターの立ち居振る舞いについて報道されることはありますが、あのような報道を見聞きして自分も「日本人」であることを意識することはありますか？また、仮に外国人の人達から「日本人の特徴は何ですか？」と問われたら、何と答えますか？意外とこれらの質問に答えるのは難しいのではないのでしょうか？本稿では、これらの疑問に対する私なりの答えについて、私の思

い出話も交えながら考えてみたいと思います。

本題に入る前に、簡単ではありますが「日本」という国の特徴を考えてみたいと思います。日本は四方を海に囲まれた島国であり、歴史的に様々な国の影響は受けつつも、各時代においてそれらを時には取捨選択し、また時には自分たちなりにアレンジして独自の文化や習慣を形成してきました。これが陸続きの国であったならば、もっと「独自」色は薄れ、隣国との違いが少なくなっていたかもしれません。このことは、その国に住む人を見ることがよく分かるのではないのでしょうか？最近では日本でも普段の生活をしている中で外国人（旅行者の方も含めて）の方を目にすることは多くなってきましたが、それでも日本では「日本人」が圧倒的多数をしめています。所謂、「単一民族国家」というやつで

す。このような環境に生まれ育った私達からすると、あまりにも普通すぎて何の違和感も感じない人が殆どだと思いますが、他の国に目を向けるとそれが普通ではないということが分かります。例えばお隣の中国は「56」の民族で構成されているとのことですし、アメリカやその他ヨーロッパの国々も様々な民族や人種が混在している状態が普通となっており、所謂、「多民族国家」になっているわけですから。このような国の性質の違いがよく分かるのが、それぞれの国の政治的な代表者である政治家の顔ぶれを見るとよく分かると思います。もし興味があれば、一度、色々な国の「議会」の風景を見てみて下さい。それぞれの国がどのような人達で構成されているのかがよく分かります。

では、日本のような「単一民族国家」とアメリカや中国のような「多民族国家」では「国」

をまとめる上での苦労は同じものなのでしょうか？それとも違うのでしょうか？もちろん同じような苦労もあるうかと思いますが、最も大きな違いは、「多民族国家」では自国民に「○○人である。」という認識を持たせるために多大な努力が必要となってしまうということです。自国民が様々な民族や人種で構成されている場合、当然それぞれのバックグラウンドが違うわけですから、「共通項を見出し、それを浸透させる」という努力や工夫を続けなければならないというまで経つてもまとまることができないわけです。逆にいうと、そのような国ではそういった努力や工夫が行われているため、「○○人としての意識やその特徴」といったものを認識している人が多いように感じられます。一方で、日本のような「単一民族国家」では、特段の努力や工夫をしなくても何となく「日本人」という概念や共通認識を持

つことができちゃうので、普通に日本で生活しているとかななか「日本人である」ということを意識したり、「日本人の特徴」について考えたりすることはありません。

かくいう私も当然のことながら、高校を卒業するまでは自分が「日本人」であることを深く考えるわけでもなく、身の回りの環境が「普通」であると感じながら生活していました。ところが、大学への進学を機に自分を取り巻く環境が大きく変化し、それにより自分が「日本人であること」や「日本人としてどうあるべきなのか」について考えさせられることになりました。

私は幸運にも両親の理解と支援を頂き、高校卒業後にオーストラリアの大学に留学することとなりました。それまで海外に行ったことはなく初めての海外が留学のタイミングと

いうことになりました。今まで日本でしか生活していなかった私は「外国人」という立場になったことはありませんでしたので、この時が私の人生初めての「外国人」という立場での生活となったわけです。オーストラリアでの学生生活は楽しいことも大変なことも色々とありましたが、学業でも日常生活でも、自分がこの場所では「外国人（日本人）」であるということを意識しない時はありませんでした。その中でも、学業の傍らで所属していた大学の剣道部での思い出は、日本人である自分を見つめ直すとても貴重なものでした。

剣道は言わずと知れた日本の主要な武道の一つです。剣道の稽古にあつては、試合に勝つための技術の習得は他のスポーツ等と同様ではありますが、剣道をスポーツではなく武道と位置付ける大きな要因の一つとしては、「礼に始まり、礼に終わる」に代表される武

士道的精神の涵養を重要な要素として位置付けているところにあると思います。しかし、やはり高校までの部活動ではどうしても「試合に勝つ」ということが最優先事項として位置付けられてしまい、試合に勝つために日夜稽古に没頭するというのが当たり前でした。特に20年前の部活動、さらには全国大会に出場するような部活での稽古となると平日も夜遅くまで、土日も朝から晩まで一日中稽古し続けるといったのが普通であり、自分たちが稽古している内容について「なぜ？」という疑問を抱くことも殆どありませんでしたし、仮に疑問に思ったとしてもそれについて深く考えたりする余裕もなかったため、日本の武道の代表格である剣道を習っているにも関わらずそこに散りばめられている「日本人としての心」のようなものを意識することも殆どありませんでした。しかし、そのような環境

で稽古を繰り返しながら、実は無意識の中で様々な「日本人的特徴(感性)」を身につけていたということには当時は全く気がついていませんでした。

そのような私がオーストラリアの大学に留学し大学の剣道部に入部したわけですが(オーストラリアの大学に剣道部があるということについては、私も大変驚きましたが、本稿ではその部分については割愛させて頂きます)、オーストラリアで剣道をする事で私は大変多くのことを学ぶことになったのです。

まず初めに思い出されるのは、技術的な側面を通して見えたことです。日本とオーストラリアを比べれば当然ではありますが、剣道人口も剣道の技術レベルも日本に一日の長があります。(柔道は競技人口においてフランスに抜かれているようですが・・・)そのため、

私の大学の剣道部にあっても日本の大学の剣道部と比較したら技術的に劣っていたことは間違いありません。しかし、日本を超えていたかもしれないのは、所属していた学生の剣道に対する気持ちであったと思います。オーストラリアという国でわざわざ日本という外国のしかもオリンピック等の種目でもなく世界的な知名度も決して高くない「剣道」をやっているのは、正直、「もの好き」以外の何者でもないと思います。でも、だからこそ彼等や彼女等の「剣道が好き」という気持ちは非常に純粋であり、強いものがあつたと思います。翻って、オーストラリアに渡ったばかりの私は、もちろん剣道が好きではありませんでしたが、散々学生時代に顧問の先生の指示するままに稽古に明け暮れていたため、「楽しむ」という気持ちを忘れてしまっていた気がします。そのような中で、オーストラリアの学生から

すれば大好きな剣道の母国である日本から日本人学生が来た、ということでも当初からとても暖かい雰囲気で私を迎え入れてくれ、稽古の際も競うように私のところに来てくれました。そのような雰囲気でしたので、入部後は、道具について、各所作について、そして各技術についてと様々な疑問や質問をぶつけられました。当然彼等からすれば、「日本人」である私なら全てを知っているだろうという期待を持っていたと思いますし、それが私にもひしひしと伝わってきました。しかし、いざ質問を受けてみると彼等の様々な「なぜ？」に答えられない自分がそこにはいました。例えば道具について「袴には折り目があるがどういう意味があるのか？」と聞かれても、日本では袴であるとか考えたことがなかったの、疑問にも思ったことがありませんでした。

（表側の5本は「仁義礼智信」の五常を、裏

側の1本は「二心がない(誠)」を意味しています。

では、技術面では問題はなかったのかという決まてそうではありませんでした。彼等の疑問の深さというのが私の想像を超えていたのです。単純に剣道の技術だけであれば当然説明することはできましたが、「なぜそのような技術になったのか?」という疑問まで深掘りされると、途端に答えられなくなってしまうのです。ではそのような疑問に答えるためにはどうしなければいけないのかというと、剣道の歴史を遡り、明治維新後にそれまであった様々な剣術の流派からどのように「剣道」というものが形作られ、それぞれ技術にはどのような成り立ちがあるのかについて紐解かなければならないわけです。もちろん、「そんなことは知らない。」と返すことはいくらでもできましたし、もし日本で日本人に同じこと

を問われたらそのように回答していたかもしれないが、なぜか、オーストラリア人の彼等を前にするとそのような回答をしてはいけなと強く感じたわけです。そのため、彼等から深い質問を受けるたびに色々な本や資料を読み漁ったり、日本にいる知人に教えを乞うたりしながら調べ上げ、彼等に事実を伝えるということを繰り返すことになりました。

この時に私が感じていたのは、「彼等の真摯な疑問に誠実に対応しなければいけない。」ということではあるのですが、更にその感情を深掘りすると「剣道という日本の武道に関するこの質問を受けているのに、それに対して適当な対応をしてしまうのは、剣道をしている日本人としてあってはならないのではないだろうか。自分が適当な対応したら、剣道をしている日本人自体が適当な人達だと思われるてしまうのではないだろうか。」ということ

であつたのだと思います。多数の外国人を前に日本人は私だけという環境が、私をそのような考えに至らせたのかもしれませんが、当時の私は必死に彼等の思いに応えなければという一心であつたように思います。しかし、このように「剣道」というものを通じて日本文化の一部を深掘りしたことで、そのような奥の深い文化があることの素晴らしさや、そのような文化がある国の出身であることの幸運さというものを感じることに繋がり、改めて自分が「日本人」であるということに気が付かされました。

別の思い出も紐解いてみます。ご存知の方が殆どであると思いますが、オーストラリアは多民族国家です。ヨーロッパ系の方も多いですが、アジア系の方もたくさんおりそれぞれのバックグラウンドを踏まえた独自のコミ

ュニティも色々形成されており、それがオーストラリアという国の魅力の一つにもなっています。オーストラリア人にとっては当然のことながら日本人は外国人ですし、他の国と比較して何かを優遇しているわけでもありません。日本の文化は他の国の文化ということで尊重してくれますが、特別扱いをするわけではありません。このような環境下では、「剣道」についても面白いことが起こります。日本にいと「剣道」はあくまで剣道であり、日本の武道であることに疑いを持つ人はいないでしょう。しかし、オーストラリアでは、日本人がするように主張するのと同じように、実は韓国の方は「クムドゥ」と呼んで韓国発祥の武道であると主張し、剣道クラブとは別に「クムドークラブ」が存在しています。本稿では、どちらの主張が正しいのかについての話は致しませんが、初めてその事実を知っ

た当時の私は非常に驚きました。しかし、当初は「そうはいうものの、別物な訳だから交わることはないだろう。」と思っていたのですが、ここでオーストラリアの特徴が出るわけです。オーストラリアにとっては「剣道」でも「クムド」でも道具もルールも基本的には同じなわけであり、正直なところどっちでもいいのではないかということで、各種試合や大会は関係なしに開催されます。(大会の主権がどちらかによって呼び名が変わります。)もちろん、剣道をやっている身からすると、クムドーは剣道の「スポーツ」的要素を強調した様な競技になっており、異なる部分が多いと感じてしましますが、それはあくまで剣道をやっている身だから感じることなのかもしれません。例えば技術面での例を挙げると、剣道の場合、竹刀はあくまで刀の代用であるため刃筋(刀の刃がついている側)がとても重視

され刃筋が通っていないなかった場合は例え指定部位を打ったとしても一本にはなりません。クムドーではあまりその点は重視されません。また、作法面での例を挙げると、剣道では一本とろうが取られようが、勝とうが負けようが喜びや悔しさを表現することは禁忌とされていますが、クムドーではそういったことはなく、一本取ればガッツポーズをしますし、取られれば審判に抗議をすることもあります。このような違いはあるものの、やはりオーストラリア人からすると大きな違いとはならないため、剣道大会でクムドーの選手と試合をすることもあれば、クムドーの大会に参加することもありました。しかし、ここでまたややこしいのが、それぞれの団体に所属するオーストラリア人はそれぞれの団体の主張が正しいと強く信じているわけで、私の所属する剣道部の皆も私以上に「剣道は日本のもの

だ。」と考えており、クムドーを受け入れたくないという意思が強いのです。そのような環境で何が起こるかという、分かりやすいうと所謂「日韓戦」が発生し、あれこれ言っても埒が明かないからという理由で「試合に勝った方が優れている」理論が形成されるわけです。私は正直、当時も今も別に剣道のルールがどうだということを気にはしておらず、そういう風に考えて主張する人たちはすれば良いと思っており、大切なのは自分がやっていることに向き合っただけでも自分を高めることだと思っています。しかし、そのような環境で試合をするからにはやはり負けるわけにはいかなくなるわけです。別にメジャースポーツの世界大会でもないのに、勝とうが負けようが何かに影響が出るわけではありませんが、世間の誰の目にも止まらない場所で行われていた試合で、自分の勝手な思い込

みかもしれませんが、すごく重いものを背負ってクムドー選手と向かい合っていました。しかし、このような環境での試合を経験することで自分の中での姿勢が明らかに変わったのを感じました。当初は「試合に負けない。」ということに重点を置いていましたが、それが次第に試合で勝つ以外の要素でも負けないということを意識するようになったわけですから、幸運にもオーストラリアにいた間に試合に負けることはありませんでしたが、一本取られることはありました。その時にも、先ほどいったように悔しさを出すことはしない。決勝戦で勝っても喜ぶことはしない。試合後も、相手や相手チームの人達がいる前では喜ぶことはしない。といった、所謂、剣道で身に付けてきた所作を愚直に実践することを強く意識するようになったわけです。このような立ち居振る舞いにどのような効果があったのか

は正直分かりません。ただ、結果として剣道をやっていいるオーストラリア人ともクムドローをやっているオーストラリア人とも友好を深めることができ、クムドローのチームから「稽古に来てもらいたい。」と誘っていただいた時には、「剣道をしている日本人として間違ったことはしていないかったのかな」と思うことができました。

これら二つのエピソードを通して感じたことは、「日本人」というものを意識する時や意識しなければならない時は突然来るということです。外国に行った時や外国人と接する時は、自分が正に「日本人」の代表になります。その時接した外国人の人は「自分」という鏡を通して「日本人」というものを見るわけです。私の行動が果たしてどのように受け取られていたのかについては確認のしようも

ありませんが、これらの経験から感じたことは、会話をしたりスポーツや何かの活動をしたりする場合はその内容もちろんではありませんが、それよりも相手との接し方や立ち居振る舞い、物事への取り組み姿勢といったものこそが大切なのだという事です。では、これらの立ち居振る舞い等は何か特別な勉強や研修を受けなければ身につかないのでしょうか？決してそんなことはないと思います。

日本が時間をかけて練り上げていった日本人としての本質的な素養や美德こそがそのまま答えであるように感じます。残念ながら最近では、勉強にしろスポーツにしろどうしても「効率」や「結果」というものが重視されがちな部分もありますが、これらの日本人としての本質的な素養や美德というものは決して難しいものではないと思います。私には現在1歳になる息子がおり、共働きであるため今年か

ら保育園に通っていますが、保育園で園児たちが教えられていることの殆どが、正に、日本人が長年かけて培ってきたものとして現れているように感じました。また、以前、鹿児島で勤務していた際に入来麓を訪れた時、道ですれ違った小学生の男の子がわざわざ立ち止まってお辞儀をしながら「おはようございます」と挨拶してくれました。これも日本の文化や習慣の素晴らしい側面の一つだと思えます。日本は島国という特性も相まって、外からの影響を極端に受けることなく、じっくりと時間をかけて独自の文化や習慣を形作ってきました。そのような特徴がある国に生まれたということを認識し、自分たちの文化や習慣を大切にしつつも相手を尊重する心を持つことさえできれば、その姿こそが「日本人」なのだと思います。

(海上保安庁一等海上保安正)



曾木発電所 ― 日本の化学工業発祥

のきっかけとなった発電所

― 歴史を訪ねる旅 (20)



下土橋 渡

旭化成株式会社と積水化学工業株式会社という、日本の化学工業界を代表する2つのトップランナーが日本窒素肥料株式会社（現在のチッソ株式会社、事業会社としてはJNC）を前身とする会社だということをご存知だろうか。また、大手化学メーカーの信越化学工業株式会社も日本窒素肥料株式会社と長野県の電力会社信濃電気（後の長野電気）の合弁会社として長野市に設立された会社である。

日本窒素肥料株式会社のスタートは、熊本

県と県境を接する鹿児島県伊佐市（旧大口市）の曾木に建設された水力発電所だった。今でもその発電所の遺構を見ることができ。いつもは鶴田ダムของダム湖の水底に沈んでいるが、梅雨期に入ってダム湖の水位を調整するためにダムの水が放出される6月から9月の間その姿を地上に現わす。

遺構といっても外壁がわずかに残って立っているだけである。そのセピア色に古ぼけた佇まいは、ヨーロッパの中世の古城に似た印象を与える。そして、それがかつての水力発電所の遺構だと知ると、盛衰のロマンと哀愁を感じずにはいられない。

一、野口遵と日室コンツェルン

“電気化学工業の父” あるいは“近代化学の父” と呼ばれた野口遵は、1873年（明治6年）に石川県の金沢に生まれた。東京帝国大学電気工学科を卒業後、東京電灯会社（現

在の東京電力の前身）の依頼で渡米した後、1906年（明治39年）に鹿児島県伊佐郡大口村（現・伊佐市大口）に曾木電気株式会社を設立して発電事業を始めた。

1907年（明治40年）、曾木の滝の流量と落差を利用した発電所が、滝のすぐ下に完成した。曾木発電所は、伊佐市大口にあった牛尾鉾山の動力を確保するために建設された発電所だったが、牛尾鉾山の電力使用量が予想より少なく、近郊町村の電灯用に供給しても800kWの電力の半分が余ってしまい、発電事業の経営も思わしくなかった。

そこで、野口は、カーバイド製造の第一人者だった藤山常一を招き、熊本県葦北郡水俣村（現水俣市）に日本カーバイド商會を設立し、曾木電気の余剰電力でカーバイド（漁船や自転車の点灯燃料）の製造を始めた。従業員45人の小さな工場だった。

翌1908年（明治41年）には、曾木電気と日本カーバイド商會を合併し、日本窒素肥料株式会社を設立した。日本窒素肥料株式会社は、野口が空中窒素固定法という画期的な方法で化学肥料硫酸の製造を始めてから拡大してゆく。

1921年（大正10年）に、野口は、イタリアのカザレー博士が発明したカザレー式アンモニア合成法の特許権を獲得し、水俣の工場内に新工場を建設しようとしたが、地元民の反対にあう。そこで、宮崎県延岡に新工場を建てることになった。延岡を選んだのは、五ヶ瀬川や大瀬川の豊富な水源を利用した水力発電が可能だったこと、加えて広大な土地の確保が可能だったことによる。

1923年（大正12年）に、カザレー博士の出席のもと日本窒素肥料株式会社延岡工場が操業を開始した。野口は合成硫酸の製造を



野口遵（のぐち したがう、1873 ～ 1944 年）^① 昭和前期の実業家。日本窒素肥料（現・チッソ）を中核とする日室コンツェルンを一代で築いた。旭化成、積水化学工業、積水ハウス、信越化学工業の実質的な創業者でもある。

始める一方、ベンベルグ人絹を製造、経営の多角化をはかる。

野口は水俣工場、延岡工場を拡張しながら、朝鮮にも進出し、電源開発と大規模硫安製造工場の建設を行った。12箇所の発電所で電源を確保し、興南、永安、本宮の3つの工場では主に合成アンモニアを原料にした硫安、硫燐安などの肥料が製造されたが、他にも油脂



朝鮮窒素肥料 興南工場（咸鏡南道咸興郡）^②

石炭低温乾留、アルカリ、カーバイド、火薬の製造、金属精錬など多角的な化学製品の生産が展開された。

朝鮮における従業員数は4万5千人に及び、設備能力では水電解設備が世界第1位、硫安の年産能力が世界第3位と、世界屈指の化学コンビナートに成長した。

日本窒素肥料株式会社はますます巨大化し、水俣、延岡、朝鮮の興南を拠点に、日本窒素肥料株式会社を中核とする新興財閥いわゆる日窒コンツェルンを形成、1941年(昭和16年)当時で直系子会社は30社に及んだ。コンツェルンとは、資本的な繋がりを通じて複数の企業が結び付いた、実質的に一つの企業グループを形成している状態を指す。

このように事業拡大を続けていった日本窒素肥料株式会社だったが、1945年(昭和20年)の敗戦により、主要拠点であった朝

鮮の資産など全財産の8割を喪失するとともに、戦後の財閥解体令により、1949年(昭和24年)に解散し、水俣工場が新日本窒素肥料株式会社(現在のチッソ株式会社)に、延岡工場が旭化成工業株式会社(現在の旭化成株式会社)に、プラスチック事業関連が積水産業株式会社(現在の積水化学工業株式会社)になつて生まれ変わった。

こうして、出力800kWの曾木発電所からスタートした日本窒素肥料株式会社は、旭化成株式会社や積水化学工業株式会社といった、日本化学工業界を代表するトップランナーを輩出した。曾木発電所が「日本の化学工業発祥のきっかけとなった発電所」といわれるゆえんである。

野口遵が曾木発電所をつくり、その余った電力を活用するため、水俣に日本カーバイド商會を設立することがなかったら、わが国の

化学工業の発展も違ったものになっていたことであろう。

二、曾木発電所遺構

曾木の滝のすぐ下に建設された出力800kWの第一発電所に代わり、曾木電気と日本カーバイド商會が合併し日本窒素肥料株式会社が設立された年の翌1909年（明治42年）には滝の約1.5km下流に出力6700kWの第二発電所が完成した。

レンガ造りの洋風建築の発電所もさることながら、ドイツのシーメンス社製の発電機の導入や5つのトンネルや水路橋を持つ約1.5kmの導水路建設など、一大事業であったため、全国から技術者や作業員が集まり、下ノ木場集落は再び活気に包まれた。

ダムの水が放出される6月から9月の間中世ヨーロッパの古城に似た姿を現わす曾木発電所遺構は、この第二発電所の遺構である。

遺構は、その歴史的な価値が認められ、国の登録有形文化財に指定され、近代化産業遺産に認定されているが、2021年（令和3年）の豪雨で一部が倒壊してしまった。倒壊して散らばったレンガの塊や欠片は大型クレーン作業によって回収され、現在保管されている。写真（2025年4月撮影）に写っている遺構うしろの鉄板のプラットホームは、クレーン作業のための足場である。

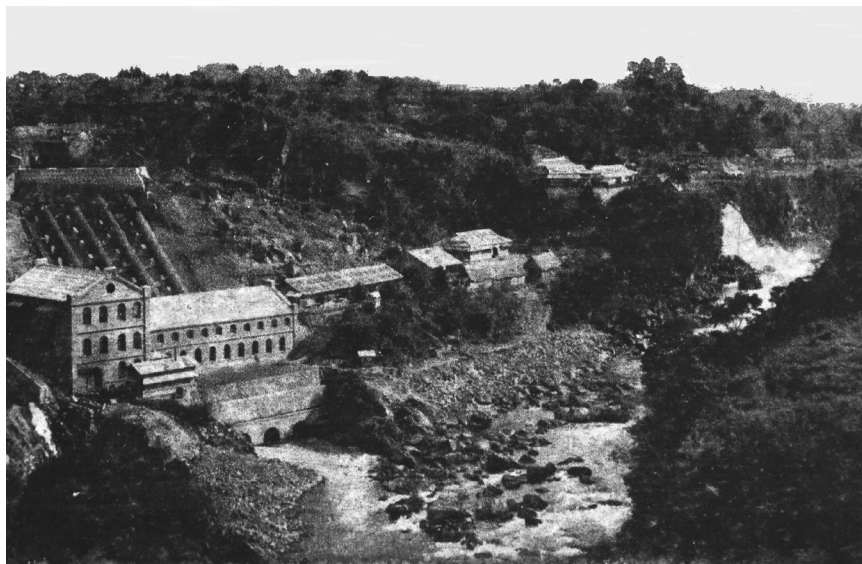
崩壊した部分は、登録有形文化財としての価値を損なわないよう、元の状態に復元されることになっている。復元作業には、倒壊してばらばらになったレンガの塊や欠片を3次元データ化し、それらがどここの場所にあったのかを特定する最新の3Dデータ技術が駆使されるという。復旧工事の完了時期は未定であるが、崩壊前の姿に復元されるのを楽しみに待ちたい。



一部崩壊後の曾木発電所遺構（2025年4月撮影）



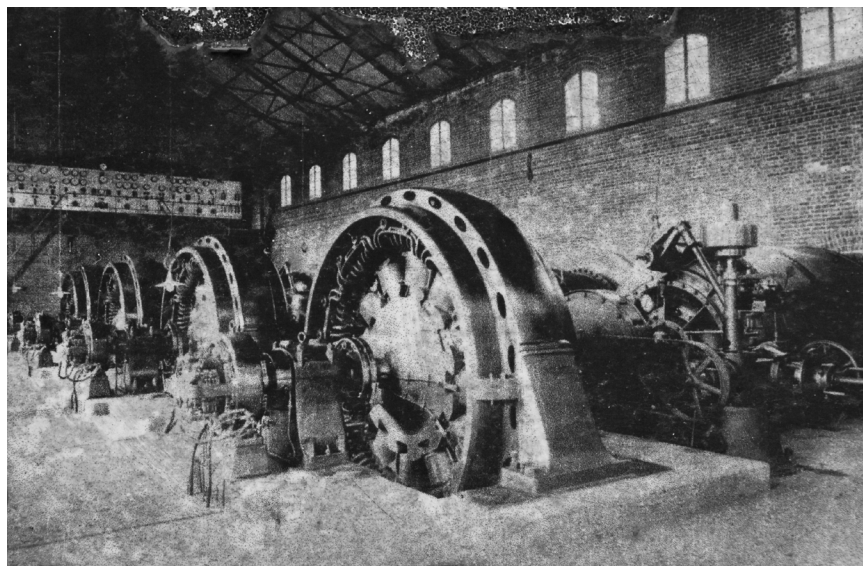
崩壊前の曾木発電所遺構



曾木第二発電所遠景⁽⁴⁾



曾木第二発電所全景⁽⁴⁾



ドイツ製の発電装置⁴⁾

補遺

そのことが、この小稿の論点ではないのであるが、水俣病を抜きにして日本窒素肥料株式会社は語れない。以下に示す年表でわかるように、創始者の野口遵が亡くなる数年前頃から水俣病の原因とされるメチル水銀が工場から流出されていたようである。そして、日本窒素肥料株式会社が解散し、チッソ株式会社、旭化成株式会社、積水化学工業株式会社が設立されて数年後に、水俣病第1号患者が発病した。

1906年(明治39年) 鹿児島県大口に

曾木電気株式会社を設立。

1907年(明治40年) 熊本県水俣に日

本カーバイド商會を設立。

1908年(明治41年) 日本カーバイド

商會と曾木電気株式会社が合併して、

水俣に日本窒素肥料株式会社を設立。

1941年(昭和16年) 水俣工場で塩化

ビニールを生産、工場からメチル水銀

流出。

1944年(昭和19年) 野口遵が死去。

1946年(昭和21年) 延岡工場が旭化

成工業株式会社となる。

1947年(昭和22年) プラスチック事

業関連が積水産業株式会社となる。

1950年(昭和25年) 水俣工場が新日

本窒素肥料(株)となる。

1953年(昭和28年) 水俣病第1号患

者が発病。

わが国の近代化学工業の基礎を築き、日本化学工業界のトップランナーを輩出したことを思えば、水俣病という大きな公害を引き起こしたことがなお一層残念に思えてくる。

曾木発電所の遺構は、今は化学工業と何の

関わりのない山あいの川べりの夏草の中で、

静かに佇んでいるのみである。

〈夏草や^{つむぎ}兵どもが夢の跡 芭蕉〉

(元九州職業能力開発大学校教授)

【参考にしたサイト等】

(1) 野口遵ーウィキペディア

(2) 日窒コンツェルンーウィキペディア

(3) 「旭化成の歴史」(旭化成株式会社公式

ホームページ)

(4) 曾木発電所遺構展望台の案内説明板「曾

木発電所から学ぼう」



アメリカは自滅し、信頼と技術で 今、日本が世界の中心になった



中西 喜彦

一、はじめに

今年は戦後80年を迎えました。いまだにウクライナ戦争やガザ地区の惨状そしてトランプ大統領がイランへの爆弾の投下を命令するなど、戦火は止むことはありません。

80年前の6月福岡市の自宅で焼夷弾の投下を受け、翌日は幹線道路沿いの歩道に亡くなられた方々の死体が並べられているのを目撃しました。丁度小学3年生のときでした。今年米寿を迎えましたが、当時の怖さを出すと共に、現在の世界情勢を見て進歩がないあをつくづく思います。

また、一昨年岸田前首相が訪米時にウクライナへの援助を約束するとともに米国に我々は共にあると祝杯を挙げられたと聞きました。一方、最近石破首相が米国との関税交渉後の報告会で米国になめられてたまるかと発言されたと聞きました。日本国として考えた時なんとなく矛盾しているようですが全体的にみると理解できるような気がします。

前米国大統領バイデンの時代、今回はトランプ米大統領の時代です。同じ米国でも全く考え方の違う勢力が覇権を握っており、前述のような事象を理解するには歴史的な成り立ちや地勢的な成り立ちを知ることが必要であります。

二、世界の現状

現在、主要国として米国、中国、EU、ロシア、日本などが世界で認められています。特に米国はこの80年間世界に君臨してきま

した。

歴史的な視点からは19世紀はヨーロッパの時代、20世紀はアメリカの時代、21世紀はどうなるのかという瀬戸際に差し掛かりました。

歴史的にみると、日本は2600年余の歴史を持ち天皇を中心とした統一国家を維持してきております。これに対して米国は約240年間を大統領制で統治されています。

一方、中国は4000年の歴史といいますが、実際は戦後の1949年に中華人民共和国として設立された新しい国家です。

国力とは経済力、軍事力、外交力などが挙げられますが、それに加えて国家を統治する理念が大切だと思います。米国はヨーロッパで起こった民主主義、自由主義、博愛主義をもとに資本主義を発達させて繁栄を得てきました。

筆者は以前、落合莞爾氏の「金融ワンワールド」を読んで、ヨーロッパにおけるユダヤ系の人々の歴史を知りました。同氏の研究をみるとユダヤ人は、世界の金融を支配している種族です。

近世ではフランス革命やロシア革命を起こし、さらにイギリスの繁栄に寄与しました。さらに米国に一部移動し第2次大戦後はアメリカで完全に主導権を握っております。

三、食糧生産の方法の違い

筆者は、それぞれの民族の行動を知る目安として、狩猟、牧畜、稲作などの食糧生産方法による特徴が大きな影響を及ぼしていると考えています。筆者は、大学で畜産学の研究に携わった関係で、欧米への出張の機会も多く、日本の稲作文化との違いを痛感しています。

例えば、牧畜を主体にして食糧生産を行う

アメリカでは、たくさん牛を扱うため、個別の判定が難しいので、そのグループの栄養状態などを見るのに、競り市において、排出された牛の糞の内容を見て、牧野の栄養状態を推定し、間接的にその牧野で飼育された牛の栄養状態を推定します。わが国の競り市では一頭ごとに体系や栄養状態で評価をします。

日本では狭い田畑を丁寧に整備して耕作が行われています。同じ食料を得るにしてもかなり大きな違いがあり、人の考え方もその状況に左右されるように感じます。

一方、欧米の牧畜を主体とするやり方では、耕地が広いため、放牧するため移動しながら良い草地を探し、フランスでは、平地では乳牛、肥沃ではない平地では肉牛、傾斜地では羊やヤギなどとすみ分けて飼育しています。

気候的にみるとわが国は温暖地帯にあるため四季に恵まれており、二毛作をはじめならかの形で作物が生産できます。

これらの食糧生産形態も民族の性質に大きな影響を与えているように思います。

四、世界を動かしているもの

①日本人とユダヤ人

日本人は一つの国を2600年維持しています。縄文時代から考えると16000年前から住んでいます。

一方、ユダヤ人は少数民族として各地を移動して現在では米国で大きな勢力として力を発揮しています。

歴史的にもヨーロッパの各国例えばスペイン、ポルトガル、フランス、オランダ、イギリスなどユダヤ人が活躍した時代は国が栄えますが、寄生する国の国力が衰えるとユダヤ人も消えています。

このユダヤ人の正体については、落合莞爾氏の「金融ワンワールド」がくわしいです。さらに日本では田中英道氏の研究によると、弥生時代から平安時代まで5回にわたって大きなユダヤ人の集団が渡来していることが明らかになっています。7世紀ごろまでには日本人として同化しておりユダヤ人の名前は出て来ません。

現時点で、世界を俯瞰してみた時に科学的に先進国と言われる国の中にユダヤの名前はないですがいずれの国も大きな影響を受けています。おもしろいことに米国のユダヤは完全に米国を動かしてきました。

ユダヤ人の特性は前述のように金や名声を追い求めることに熱心です。現在の米国の衰退の様子をみると、ユダヤ系の人たちは国家の財政を超える財産を持ち、所属する国や人々を圧迫する立場にあります。

②大谷翔平選手の米国での活躍

大谷翔平選手が日米で高く評価されている理由について考えてみました。

まずは、技術の高さです。大谷選手は、打って良し、投げて良し、さらには走って良しと、多くの結果を残し、連日私たちを楽しませてくれています。しかし、彼の魅力はそれだけではないと考えます。大谷選手は、野球そのものに楽しさを見出し、富や名声を求めるのではなく、純粹かつ愚直にプレーしているように感じます。さらには、チームメイトやファン、道具やグラウンドなど野球に携わるすべてのものに敬意を示す姿勢は印象的であり、敵チームをも魅了しています。また、祖父・父・自分という3世代にわたって野球への価値観を共有していることも大きな点です。

彼の個人としての技術を高めるだけでは

なく、集団としてより良くしようと取り組む姿は、日本の文化に由来する点が多いと思います。

③トヨタ自動車の戦略

トヨタ自動車は、無駄な在庫を抱えない「ジャスト・イン・タイム」という生産方式を取っています。さらに、使用される地元で生産し、その地元の経済発展にも貢献している点は特に評価されています。なおかつ社内的には各担当部局で常に技術や商業情報について最高の技術を求めるための論議を重ねています。

アメリカでは上司が自分の考えをもとに作業を進めるようですが、トヨタでは現場の作業員が意見を出し合って作業を進める事が社風になっています。またローカライゼーションを生かして地域に密着した自動車づくりに励んでいます。最近、10年程前からヨ-

ロッパや米国において脱炭素的考え方が盛んになり電気自動車が推奨されるようになりました。これに対してトヨタはハイブリット車、水素車、さらには水で走る車などまで研究を進めてきています。欧米中においては、電池の性能が不十分のままに進めたために充電の所要時間が長い、暑熱や寒冷期における機能が著しく低いなど困難を極めています。今や、従来のガソリン車やハイブリット車に加えて、各地域に適したトヨタの多種類な燃料方式が見直されている状況です。

特筆すべきは欧米中で用いられているリチウム電池に代わって、固体電池が開発されたことです。これは貴金属の使用が少なく、使用時間も長く軽量です。

さらに、電池の研究を進めて、糸状で太陽光発電と蓄電を兼ねた電池を開発し、車体に張り付けたり、建物の壁に張り付けたりして

発電と蓄電が出来るようになってきました。

また、水素燃料車の一種として水の電気分解を行ってその水素を直接燃焼して動力源とすることができるようになりました。これが実現すると自動車だけではなく発電装置としても活用できます。

今や、トヨタグループは車だけではありません。今後さらに社会を動かしていくことになるでしょう。

五、アメリカの現状

戦後80年経って、現在の米国では経済力や人種の構成なども大きく変化してきています。終戦時は、自由と民主主義の普及や世界の平和を掲げて、世界を指導する姿勢を示してきました。しかしながら現在の米国は、世界経済の発展と各種民族の流入が多くなったことにより、グローバリズムを標榜する民主党とアメリカ第一主義を強く主張する共和党

とで国のあり方に対する共通の理念を持てなくなっています。その結果、政権が変わると極端な政策が打ち出され、朝令暮改の状態で順調な産業発展が難しくなっています。

特に戦後、石油を裏付けとしたドルが世界の大勢を占めてきましたが、技術の進歩によりいろいろなエネルギーが開発されてきます。例えば、米国の前政権では新しいエネルギーの研究開発を進めてきましたが、現政権では従来からの石油を中心としたものを押し進めようとしています。世界的にはこの2つの政策の是非が問題にされてきています。政治家は国の方向性や世界各国の調和を考えるよりも選挙対策に迫られ、利益集団の代表となっています。

筆者は戦後43年（昭和63年）に6か月間米国ウイスコンシン州立大学で研究することが出来ました。その時期すでに大学の駐車

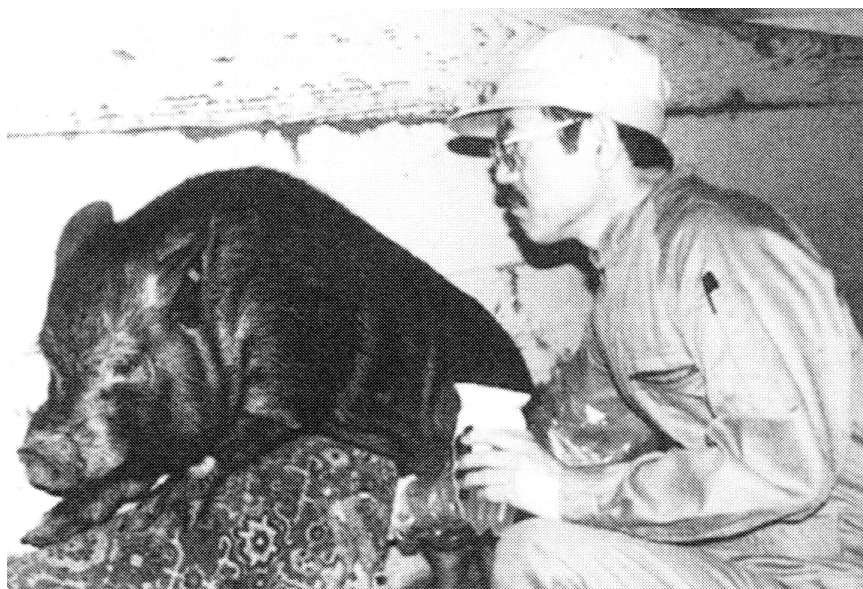
場は日本車が多く、金のない学生は中古のアメ車を利用しているのをみて驚いたことがあります。当時すでに米国は技術大国ではなくなっているとの印象を持ちました。自分の研究においてもすでに肩を並べていることを知りました。

その後、ソ連邦の崩壊が起こり、ロシアのエリツィン時代にロシア系のユダヤ人によってロシアの原油がイスラエル経由でクリントン政権に渡されたとの報があります。この時代からユダヤロビーを初めとする金融関係の活動が強化され富の一極集中が加速されています。グローバル化のもとにアメリカの産業が賃金の安い他国に移動し富の偏在が加速しました。

日本と米国が世界をリードするなかで、米国ではユダヤ系の人々が、民主党、共和党にかかわらず、政権中枢を支配しています。現在



ウイスコンシン州立大学の宿舎前にて愛車ボルボと（昭和63年8月）



研究用ミニブタ開発のための精液採取（昭和 63 年 8 月米国にて）



能「花月」（大濠能楽堂にて、舞っているのが筆者。63 歳）

では、米国のGDPの約9割が0・1%の人たちに配分されています。したがって、下層の人は十分な待遇が受けられず、社会が非常に不安定な状態になっています。この状態をみるとユダヤ系の人たちは経済力や科学的力には優れているが国民全体を統治する能力、例えば、他者を重んじる能力に乏しい。これが、ユダヤ人が国を持たなかった理由と考えられます。

六、日本文化の原点

日本は太陽信仰が主体であり、山や岩木を崇拜します。先祖を神様と考え天皇は最も長く続いた家長であります。ユダヤ人は鳥居や柏手お祓いなどの文化を持ち込みました。

田中英道氏は、その帽子と鬘みづらがユダヤ人の特徴そのものであることから古墳の武人埴輪がユダヤ人であることを発見しました。また法隆寺の仏像を見て、四天王などの高い鼻を

した顔がユダヤ人特有の顔と同じであると指摘しています。文献以外のいろいろな彫刻や各地の古墳から出土した埴輪などをもとに、ユダヤ人が5回にわたって渡来して日本人の先祖になっていることを明らかにしました。

現在の日本文化は室町時代に確立されたといわれていますが、田中氏は、お能の創始者である観阿弥、世阿弥もユダヤ人であると指摘しています。今までは中国から来た人と思われていましたが、全く違っておりました。筆者が本誌20号の「能は私の道標」で紹介しておりますので詳細は省略いたします。

能の内容は過去にあつた源氏物語や平家物語あるいは各地の風土記の主人公の活動を1人称で演じるという劇です。面や衣装などが美術品として残されています。また、日本語の標準語の作成に非常に役立ったといわれています。江戸時代、他の藩士同士の会話で

話を通じない時に、能の台本である謡曲中の言葉で意味を通じ合ったという逸話が残っています。江戸時代、剣道と同様に能を藩士に教える家もありました。

七、終わりに

戦後80年の6月をもって日本は米国から経済的独立を達成できたと思います。カナダのアルバータで開催されたG7において新エネルギー問題を検討する会議にトランプ大統領がキャンセルしたのを機にG3としてカナダ、日本、ドイツによって米国を外した新しい交易の枠組みが相談されました。

これらの行程は国単位ではなく企業の業務の一環として行われたため米国政府が関与することもなくまたくまに完了しました。

その結果、この80年間の日本国の安定的な行動が信頼を受けてこの新しい体制が出来上がりました。

現時点で見るとユダヤ系の人は米国を主導してきました。主としてこの80年間はオイルダラーのもと金融力で世界を支配してきました。これに対して、日本は米国の唱える民主主義と自由主義と平等主義をもとに技術力を磨いて平和外交を続けてきました。

振り返ってみると米国の影響のもとに過ぎてきたことになりましたが、実質的にはユダヤ人の思想のもとに過ぎたことになりました。

しかし、米国は富の分配の差が大きいため、富の配分に外れた人たちは、麻薬や暴力に侵され、社会の混乱が大きくなっています。対外的には平和主義を唱えながら現実的には資源を奪ってきました。

米国の極端な関税をはじめとする規制を逃れて多くの国が日本を通じての交流を強めてきています。

これらは日本が勧誘したわけではなく、80年間の活動を評価して集まって来たものです。

ユダヤ人は、非常に抽象的な考えが強く、金銭を始め宗教や芸術や哲学や科学や技術の功績を残してきました。しかし、その性質は個人性の強さがあつて金銭や名誉とかに思考するので、国家を形成するよりも、大きな国の財政面で活躍してきています。日本が永年の統一国家として持続してきたのは、縄文人の集団性に加えてユダヤ人の経済力や武力などが加わり天孫系を補佐してきた歴史によります。

今後、米国で長期研究が困難になった研究者の米国シリコンバレーからの来日や研究施設の日本への移転が増加するものと思われる。エネルギーも太陽や水から直接エネルギーを得たり、人工知能や自動運転の技術な

どが発達したりすると思われます。

しかし、科学技術は進歩しても、人類が世代交代を行っても、人間そのものは変わらないでしょう。かえって科学技術にたよって身体は退化するかもしれません。日本は万世一系の歴史を持ち、世界の中で長い歴史を持ち、古い史跡を持ち、現代まで豊富な文化を持っています。これらの世界に実際に接触してその実態を感じてもらいたいものです。

筆者は、日本は「軍事力」ではなく自国の信頼性や技術力をもって世界に一層貢献できると考えます。戦争のない世界にするためには、もつと日本的な知恵と技術を世界に供給すべきです。今こそ、日本人皆が自信をもつてこれらを世界に示し、中心的な役割を果たしていくときではないでしょうか。

（鹿児島謡曲連合会前会長、鹿児島大学名誉教授、炉ばたセイ談会会長）

船瀬殿墓 ふなせどんばか

― 入来麓史跡探訪 (2) ―

「船瀬」とは奈良時代に樋脇川の船着場に名付けられた名前です。船瀬（船着場）の管理役人の子孫は「船瀬氏」を名乗り、鎌倉時代末期でも入来院地頭から「船瀬殿」と呼ばれるほどの名家でした。「船瀬跡」から樋脇川に沿って西（上流）へ約150メートル行つたところに「船瀬殿墓」があります。船瀬氏に関した百基近くの石塔群があり、鎌倉時代から戦国時代にかけて造立された三重層塔、五輪塔、宝塔などの石像があります。

石塔の中には人吉の城主相良氏一族が南北朝時代に造立した逆修塔（死後の往生をねがって生前に自らが建立した石塔）があり、当時の入来院氏と相良氏両家の協力関係がうかがわれます。



船瀬殿墓（薩摩川内市指定文化財）



舟便の発着所があった船瀬跡（案内板が立っています）

船着場をいう「船瀬」はこれが地名となつて現代まで残っています。船瀬跡の案内板が立っている対岸は小字に「船瀬向」が残っています。船瀬氏が居住した屋敷跡は「船瀬庵」と呼ばれており、現在は個人の宅地となっています。

入来麓は、2003年に知覧武家屋敷群、出水武家屋敷群に次いで、鹿児島県で3番目の伝統的建造物群保存地区（武家町）に選定されました。

かわせみ 翡翠の遊ぶ伝建船瀬跡 渡

船瀬跡あたりの樋脇川では、シーズンになれば、無音シャッターのカメラでカワセミを撮影したり、あるいは打網であゆを獲ったりしている風景を見ることができます。入来麓はそんな伝建地区です。

「炉ばたセイ談」の生い立ち

炉ばたセイ談会・初代会長 桐野 三郎

「炉ばたセイ談」は「炉ばたセイ談会」（入来武家屋敷茅葺門邸）が一年に一回（九月）発行する機関誌です。

「炉ばたセイ談会」は作家・歴史家であった故入来院貞子氏（一九三二—二〇一）が所属する鹿児島ペンシルクラブで平成十三年に提唱、同クラブ代表の相星雅子氏ほか数名の会員がこれに賛同、他に新聞・テレビ関係者、高校・大学の教職員ほか地元の元町長などが加わっていただき、入来武家屋敷の囲炉裏辺で「セイ談」を語り合う会としてスタートしました。

「セイ談」のセイは聖、清、正から醒、政、性まで、つまり話題は問わずお互いの蒙を啓くという程度の、堅苦しくない会という意味です。

会は当初武家屋敷の一軒をお借りしてスタートしましたが、行政側の制度変更により借家制度が廃止された後、本拠を茅葺門邸、即ち入来院重朝、貞子ご夫妻宅に移して今日に至っております。機関誌「炉ばたセイ談」は入来院貞子氏が編集長となり平成十七年秋に創刊、第八号まで手掛けていただきましたが、貞子氏が同二十三年に急逝された後を承けて中西喜彦氏（鹿児島大学農学部名誉教授）が第七号以後を担当、今日に至っております。

本誌の内容は創刊号編集後記にありますように硬軟、左右なんでもありますが、執筆者には一言言を持つ会員も多いだけに、入来武家屋敷群の一角から発信されるこの小冊子が、いささかなりとも文化的な刺戟となり得ればと念じております。

「炉ばたセイ談」生みの親といってもいい故入来院貞子氏の願いも、祖霊の瞑るこの入来の地でささやかながら、一隅を照らす灯を点したかったのではないのでしょうか。

（「炉ばたセイ談第九号」より転載。桐野三郎氏は平成二九年二月に永眠されました。）

※バックナンバーは、鹿児島県立図書館の郷土資料コーナーで読むことが出来ます。

編集後記・・・

■東京の西新宿の一等地のビル内に法律事務所を開き弁護士をしていた溝口敬人氏（実は入来院本家の末裔だった）からお預かりした原稿が本号を持って全て掲載されました。溝口氏は令和5年の暮れに永眠されましたが、彼が記した「入来院」を皆様に読んでいただけることを溝口氏もきつと天国で喜んでくださっていると信じております。また、亡き母貞子から始まったこの小冊子が今年も温かいお仲間のご寄稿のおかげで発刊できたことも天国へ報告いたします。ご寄稿くださった皆さまありがとうございます。令和7年。豪雨と酷暑の夏が過ぎ、この「炉ばたセイ談」発刊の頃には穏やかな風が吹いていることを祈りながら・・・（入来院久子）

■昨年9月に炉ばたセイ談第20号を納入して下さってすぐ、薩摩川内市内にある新大同印刷（株）さんから、都合により今後冊子製本は取り扱わない旨のお話がありました。9月22日に庵主重朝さん宅で開催した炉ばたセイ談会での話を持ち出したところ、ご出席されていた白男川孝仁さんから出水

市内にある丸尾印刷（有）さんをご紹介頂きました。早速、白男川さんにお話を通して頂き、後日細かい打合せにお伺いしたところ、今まで新大同印刷さんにお願ひしていたのと同じ仕様と値段でお引き受けして頂けるということで、第21号の発行となりました。第20号まで、印刷・製本を行って頂いた新大同印刷さん、長い間ありがとうございました。そして丸尾印刷さんこれからよろしくお願ひ致します。そしてこれまで原稿をお寄せ頂いた執筆者の皆さんには、引き続きこれからもご執筆頂きますようお願い申し上げます。（下土橋渡）

「炉ばたセイ談」 第21号

炉ばたセイ談会会長 中西喜彦

編集担当 下土橋渡・入来院久子

事務局T895-1402

薩摩川内市入来町浦之名130

入来院重朝方

TEL・FAX 0996-44-3586

印刷 丸尾印刷（有）（0996-62-1278）



令和7年秋
第21号

〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名 130

炉ばたセイ談事務局